

人文会ニュース

2000. 7

- 井戸を掘った人黒田信二郎 1
- 一五分で読む生命倫理加藤尚武 3
- 中小出版社の販売・営業代行業者、
ディストリビューター菱川摩貴 9
- 101 回紀伊國屋セミナー
新しい日本史の読み方網野善彦 16
- 長野・平安堂研修レポート
その一 志と質の高さを求めて内山貞男 37
- その二 老舗の気概を感じた二日間……三上直樹 39

ボツビオ／松田博・黒沢惟昭他訳 四六判・二〇頁・二五〇〇円
グラマン思想の再検討 市民社会・政治文化・弁証法
 五八年から八九年にかけての六論文と「獄中ノート」に関する補論を収録
 高橋 進著 神奈川大学評論ブックレット・二一 八〇〇円
ヨーロッパ新潮流 二一世紀をめざす
 新政権誕生の背景と動向「転機に立つオーストラリア共和制」を追記
 西和夫著 神奈川大学評論ブックレット・二 八〇〇円
海を渡った大工道具 日蘭交流400年
 日本の伝統的木工道具の果した足跡を豊富な図版とともに解説する
 安斎育郎・李修京編 AS変型判・二五〇頁・二八〇〇円
クラルテ運動と『種蒔く人』
 戦争遂行と平和創造の面において文学や文芸が果たした役割を説明。
 東京・文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751

御茶の水書房 (価格は税別)

シリーズ 現代批判の哲学

既刊12冊 ●各巻¥2200

池谷壽夫◎著

〈教育〉からの離脱

近代に成立した子どもも大人も抑圧する「教育」的関係の構造を読み解き、新たな関係＝〈教育〉フリーな関係の構築を模索する。

梅林誠爾◎著

生命の時間 社会の時間

その流れの中で生きながら、捉えがたいもの＝時間。20世紀科学の成果を取り入れつつ、多様な秩序の総合としての時間の構造に迫る。

好評発売中

杉田 聡 男権主義的セクシュアリティ
 竹内章郎 現代平等論ガイド
青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60 [03]3219-2341・税別

文明のなかの博物学

西欧と日本 〈上・下〉

西村三郎 近世にともに絢爛と花開いた「西と東の博物誌」を壮大なスケールで考察した画期作。「和辻哲郎文化賞」受賞 ◆各3200円

鯨と原子炉

L.ウィナー／吉岡齊、他訳 技術絶対信仰からの脱却を求め、技術に「NO!」と言えるための政治哲学の構築を指向する。◆2600円

天に梯子を架ける方法

科学奇想物語

J.イングラム／中村和幸訳 笑いの研究から生き物や歴史の謎解き、地球から静止衛星に梯子を架ける研究まで、心躍る21話 ◆2400円

●大反響●

モラル・ハラスメント

人を傷つけずにはいられない

イルゴイエヌ 家庭や職場で日常的に行われる「見えない暴力」の実態を徹底分析 ◆2200円

紀伊国屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
 TEL03(3439)0128 (営業) 表示価格は税別

封印された ホロコースト

ローズヴェルト・チャーチルはどこまで知っていたか プライスマン著
 ユダヤ人大量虐殺は阻止できなかったのだろうか。46判・5600円(税別)

徹底批判 『国民の歴史』

「教科書に真実と自由を」連絡会編
 第一線の歴史学者を中心とした22名の執筆者が、その嘘と欺瞞を究明なきまでに批判。46判・2000円(税別)

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
 電話03(3813)4651(代表)
<http://www.otsukishoten.co.jp/>

「井戸を掘った人」

黒田 信二郎

古家時雄という人がいる。十年以上かけて八万字を超える漢字のデータベース「今昔文字鏡」を作った人である。家業は父親譲りの中華料理店、割烹の経営。家業のかたわらでコンピュータに関心をもち、やがて「三國志」のゲームソフトを作ろうとしてコンピュータで使えない漢字があるという問題にぶつか。そこから氏の探究が始まる。「使えない漢字があれば作ればよい」「どうやって作るかは漢字の歴史を知る必要がある」。そして漢字生成の過程を追究し、文字を部品要素に分解するという独自の「解字」の概念を生み出した。

その後エーアイ・ネットというベンチャー会社を設立、億を超える私財をつぎこんだがついこの間までこの会社の収入はゼロだった。その意気に感じた多くの漢字研究者が「文字鏡研究会」を結成して「今昔文字鏡」を支えている。本造りでも紙に印刷しているかぎり、印刷屋さん「ない字は活字、フォントを作ってもらおう」ということで済んできた。しかし入稿原稿がテキストデー

タになり、メールでやりとりということになると、「ゲタ」や文字化けに泣かされるケースが増えてきたのだ。特に人名、地名、古典を扱う分野での悩みは深く、電子出版、WEB出版では皆で使える漢字の共通基盤がどうしても必要となる。

いまその基盤として「今昔文字鏡」は大きな広がりを見せ始めている。特に学術研究の分野では、院生がワープロで論文を書くというレベルから古典籍のデジタルデータ化事業に至るまで、いわゆる外字問題を一挙に解決するツールとして活用の輪が広がっている。

中国の俗諺に「水を飲んだら、井戸を掘った人を忘れぬ」というのがあるが、私たちは古家時雄という井戸掘り職人がいたことを忘れてはならない。

(くろだ・しんじろう／紀伊國屋書店出版部)



一五分で読む生命倫理

加藤尚武

英米型の医の倫理は生命理学 (Bioethics) と呼ばれてもいるが。一、他者危害原則を中心とする古典的自由主義の生命倫理 二、生殖医療の領域などから提起されている社会的な許容基準にかかわる生命倫理 三、細胞工学の倫理基準を定める未来型の生命論という三つの様相をもっている。古典的な生命倫理の中心を占めているのは、他人に危害を加えない限り公共機関などの他者から制約を受けないという「他者危害原則」である。この点は、曽我、棚橋、長島『生命倫理のキーワード』(理想社) が生命倫理の領域を広くカバーしている。ところがこの原則では処理できない事例が増えてきた。典型的な問題はクローン人間問題であるが、生殖援助技術 (ART=Assisted Reproduction Technology) でも、他者危害原則の限界が見えてきている。インフォームド・コンセントを徹底して自由主義の原則を確立するという動きと、その自由主義の限界を脱却して生殖医療、遺伝子治療、細胞工学などの実用的なガイドラインを作成しようとする動きとが、同時に進行している。細胞工学の

倫理問題というのは、受精卵の一部分とか神経細胞とかを培養して移植用の組織を作成したり薬品を作ったりする技術開発で、個人の身体組織の一部が実験的に使用されるようになってきている。しかし、提供する個人には自分のDNAの内情を知られたくないというようなプライバシーがからむ。組織の提供に対して金銭的な代償を払うという形で、人体の商品化が進む可能性も指摘されている。

こうした問題の周辺には、医療技術の情報化、医療全体のEBM (Evidence Based Medicine) 化、環境ホルモン問題に見られるような社会環境と医療との結びつきというような状況がある。医の倫理の重心が個人の自己決定 (Self-decision) から公共選択 (public choice) に移動してきている。

一 古典的自由主義

自由主義とは「自己決定権に制限を加えることができるのは危害原理のみである」という立場である。したがって、

医療行為を法律で禁止できる場合は「医療行為が患者などに危険をもたらす可能性がある場合に限り」という考え方が有力である。

自由主義の医療倫理を要約すると次のようになる。① (valid consent) 成人で判断能力のあるものは、② 身体と生命の質を含む「自己のもの」について、③ (harm-principle) 他人に危害を加えない限り、④ (the right to do what is wrong 愚行権) たとえ本人にとって理性的にみて不合理な結果になるうとも、⑤ (autonomy) 自己決定の権利を持ち、自己決定に必要な情報の告知を受ける権利がある。

古典的自由主義の生命倫理学の典型的な内容はエンゲルハート『バイオエシックスの基礎づけ』(加藤・飯田監訳、朝日出版社) は世界で最初の体系書で、自由主義の生命倫理学を強く打ち出している。まぎらわしい表題だが、エンゲルハート他『バイオエシックスの基礎』(東海大学出版会) は英米でもっとも重視されている論文を集めたものである。もっと手短かに概要を知りたいという人には、加藤尚武『バイオエシックスとは何か』(未來社) がお勧めだが、学生に講義するときには便利なものに、松川俊夫『なぜから学ぶ生命倫理学』(医学芸術社)、加藤尚武『二一世紀のエチカ』(未來社) がある。今井道夫、香川知晶編『バイオエシックス』(東信堂) と加藤・加茂編『生命倫理学を学ぶ人のために』(世界思想社) は教科書として版を重ねている。

英米思想の奥行きをもっと知りたいと思うなら、ピーチャ

ム他『生命医学原理』(永安幸正、立木教夫訳、成文堂) はアメリカで定番となっている教科書の翻訳であるが、二段組五五〇頁の大著である。ピーチャム他『医療倫理学』(宗像恒次、山崎久美子監訳、医歯薬出版) がずっとコンパクトである。ロックウッド編著『現代医療の道徳的ディレンマ』(加茂直樹監訳、晃洋書房) は比較的レベルの高い論文を集めたものである。ペンス『医療倫理』(宮坂道夫、長岡成夫訳、みすず書房) は、アメリカで話題になった症例、判例を綿密に紹介、分析したもので、非常に役にたつ。

二 インフォームド・コンセント

人工妊娠中絶、信仰上の理由による輸血拒否、安楽死の正当化はいずれも「自己決定権の行使である」という古典的自由主義の原理にもとづいて行われる。自己決定権を実際に行使するには、必要な情報をもっていなくてはならない。「インフォームド・コンセント」とは主治医から情報を与えられて(インフォームド)、それにもとづいて患者自身が同意(コンセント)するのでないなら、正当な医療行為とはいえないという考え方をよりどころにしている。

フエイドン他『インフォームド・コンセント』(酒井忠昭、秦洋一訳、みすず書房) が、基礎理論と歴史を丹念に辿っている。河原格『医師の説明と患者の同意』(成文堂) は日独の判例を比較した非常に質の高い研究書であるが、読みにくいと言いうことはない。アッペルbaum他『インフォー

ムド・コンセント』(杉山弘行訳、文光堂)はアメリカでのさまざまな学説の違いを取り込んだ理論的なレベルの高い書物であるが、日本語の翻訳が堅苦しいのでとても読みにくい。秋山秀樹『日本のインフォームド・コンセント』(講談社)、金川琢雄『診療における説明と承諾の法理と実状』(多賀出版)、森岡恭彦『インフォームド・コンセント』(NHKブックス)は、英米型の倫理や法理と日本の社会習慣との溝を埋めようとする姿勢で書かれた好著である。手軽に読める分量で、最近の事例まで入れて、理論と実務のバランスのよくとれた書物が欲しいところだが、星野一正『医療の倫理』(岩波新書)をとりあえず推薦しておく。「インフォームド・コンセント」という言葉を表題に含む書物は非常に多く出版されているが、典拠がはっきりしないものや、個人の私見を中心にしたものなども含まれている。

三 安楽死

町野朔他『安楽死、尊厳死、末期医療』(信山社)、立山龍彦『自己決定権と死ぬ権利』(東海大学出版会)は内外の最新情報をバランスよく集約したコンパクトな書物である。安楽死については宮川俊行『安楽死の倫理と倫理』(東京大学出版会、一九七九年初版)がカトリシズムを背景とした理論を丹念に論じており、今でも読めばすぐれたヒントが得られる名著であるが、しかし実務的にはその後の判例の影響力が大きいので、たとえば星野一正『私のいのちは誰のもの』

の』(大蔵省印刷局)などで要点を押さえて置く必要がある。坂井昭宏『安楽死か尊厳死か』(北海道大学図書刊行会)は、臨床、倫理、法律、文学などの多角的な視点で、この問題に光をあてている。実務的に有用と言うよりは、理論的な背景や文学との関わりに気配りをした理論的な読み物である。森下直貴『死の選択』(窓社)は安楽死にかぎらず人為的に死をもたらすこと(心中、安楽死、人工妊娠中絶、臓器摘出、輸血拒否、戦争)の倫理学的な考察である。日本の安楽死の判断を決定している事件の報告として、入江吉正『死への扉——東海大安楽死殺人』(新潮社)は非常に詳細なルポルタージュであるが、資料に基づいたものとはいえ、再現的に表現しているので、そのまま資料的な価値を持つとはいえないが、実状を知るにはとてもよい。

倫理学的な問題点に関しては、レイチェルズ『生命と終わり』(加茂直樹監訳、晃洋書房)が基本的な論点をよく掘り下げている。社会的、文化的な背景をじっくりと読み取りながら、「死ぬ権利」の周辺の問題を丹念に取り集めて、結局はストア主義的な意志の尊重を認めている。文学から文化人類学的な社会習慣まで該博な渉猟が死をめぐる考察にきめこまかな陰影を映し出している。

死期が一週間以内に迫っている、肉体的な苦痛が耐え難い、患者自身が苦痛を除去することを望んでいるという古典的な安楽死の条件が、すこしずつ変わってきている。いつまでも苦痛が長続きすることから脱出したいという要求

をかなえることは許されないのか。肉体的な苦痛ではなくて精神的な苦痛でも、安楽死が認められるような場合があるのではないか。ハッケタール『最後まで人間らしく』（関田、柳沢、岩切訳、未來社）はミュンヘンの医師の実録である。シェイヴルスン『最後に死のやすらぎを』（三浦彌子訳、草思社）は「苦痛は痛みだけに留まらない」という視点から、自ら死を選んだ五人の人の詳細なドキュメントである。NHK人体プロジェクト編著『安楽死』（NHK出版）はオランダの通称「安楽死法」にもかなりの紙幅をさいており、日本の事例は当然ながら東海大学事件を中心にしてあつかっているが、脳死の問題点、脳低温療法などにも言及されている。

これらの例を見ていくと、安楽死について一律的な規準を作ることがどれほど困難であるかが分かってくる。しかし、医学はいくら発達しても、すべての苦痛を取り去ることはできない。死によって苦痛から逃れてもいいという場合は確かに存在するが、その条件を一般化したとき、その条件が濫用される危険もまたあらたに発生する。

四 脳死と臓器移植

咽孝『脳死を学ぶ』（日本評論社）、咽孝『臓器移植と脳死の法的研究』（岩波書店）が日本の脳死と臓器移植論の原点であるが、これに対して立花隆『脳死』（中央公論社）中島みち『見えない死』（文芸春秋社）、梅原猛編著『脳死と臓器移植』

（朝日新聞社）がそれぞれ違った角度から批判的な論陣を張っていた。脳死者からの臓器移植が実際におこなわれるようになって、また「臓器移植法」の改訂をひかえて、コンパクトな形で論点を整理している著作として澤田愛子『脳死と臓器移植』（第二版東信堂）の評価が高い。

法律的な観点から基本文献を集めた町野朔『脳死と臓器移植』（第二版、信山社）が便利にできている。仏教の観点からは、中野東禅『中絶・尊厳死・脳死・環境』（雄山閣）がよく考えた結果を打ち出している。著者は、現代の法律や医療技術の状況をよく調べているだけではなくて、仏教の根本精神に立ち帰って考察するという視点を貫いている。

五 性転換手術

常識的には「異常な身体を正常な身体にすることは治療行為であるが、正常な身体を異常な身体にすることは障害行為である」という基準が使われる。ここで想定されている「正常と異常」という枠組みそのものを批判する声もでている。色盲、同性愛、左利き、近親相姦、麻薬使用、ダウン氏症などに、「正常と異常」という基準を使うことは、社会的偏見であるというのである。

- 一 正常と異常の区別には客観性がない
- 二 正常者を保護し、異常者を排除する差別の構造が存在し、それはしばしば理性主義の装いをしている。
- 三 優生主義は差別主義であるから、産前診断や選択

的 人工妊娠中絶はゆるすべきではない。

「正常と異常の区別には客観性がない」という主張の代表的なタイプに、①連続説、②変動説、③少数派擁護説、④自然原因説などがある。ミッシェルフーコーの著作『狂気の歴史』（田村淑訳、新潮社）は、おそらくエンゲル・ハート『バイオエシックスの基礎づけ』にも大きな影響を与えている。

こうした客観主義への批判が強い影響力をもつのは、いわゆる「異常者」に対する偏見が、非常に強いと考えられるからである。それでは埼玉医科大学で一九九八年に行われた性転換手術を「異常な性同一性意識を正常な性同一性意識に転換するための治療行為である」と評価するのか、それとも「正常と異常という区別が存在しない以上、患者の要望に従うのは当然である」と評価するのか。①同一事例が過去の判例では違法とされている。②男性性器を人工

的に作成することはいかなる意味でも「治療」ではありえない。③もしも患者の意識が正常化したら、ふたたび同じ不幸に陥るが、救済の方法がない。

欧米諸国でも似たような倫理的吟味の経過が存在したが、メイソン、マッコールスミス『医の倫理』（塚本泰司訳、勁草書房）が参考になる。

性転換手術の正当化の条件はつぎのようになる。①患者が男性器を持たないことに精神的に耐え難い苦痛を感じていて、個人の性別の決定に際して、脳のなかの性同一性意識と性器の形態とが不一致である場合に、脳のなかの性同一性意識が決定的である。②脳内の性意識と性器の一致を、性器の生殖機能よりも重視し、性転換手術によって患者が喪失する正常な機能とそれによって得られる精神的な利益と比べたとき、精神的な救いの利益の方が大きい。③脳のなかの性同一性意識が、胎児段階の脳の性意識の形成段階

倫理21

4刷出来！

柄谷行人

柄谷行人、渾身の書き下ろし評論。カントを導きの糸に、自由、主体、責任について徹底的に考えぬく。語り口はきわめて平易。21世紀を生きる勇気を与える必読の書。

●定価：本体1,600円(税別)

敗者学のすすめ

山口昌男

従来のあらゆる分野の研究はいわば勝者の研究であった。本書はバブル経済崩壊後必要とされている、負け方の研究という課題を柱に、明治以降の敗者の諸相を明らかにしている。

●定価：本体2,000円(税別)

平凡社

東京都目黒区碑文谷 5-16-19
〒152-8601/電話03-020-29639
TEL.03-5721-1234

で生じたもので、治療不可能であり、性転換手術をする以外に、この苦痛を除く方法がない。④患者自身が自己の性同一性意識に従うことを希望し、手術による損失について十分に理解した上で、インフォームド・コンセントが成立している。

山内俊雄『性転換手術は許されるのか』（明石書店）は埼玉医大の倫理委員会で指導的な役割を果たした精神科医による経過報告と文化的背景まで含めた論点の整理である。わが国で新しい型の医療が行われるようになったとき、このような形で経過に関するアカウンタビリティが示される例は初めてである。

六 生殖医療

不妊に悩む人の中には、高額な費用を掛けて、さまざまな人為的に補助を受けた生殖技術を受ける人がいる。出生に関する倫理問題のリストを挙げると、人工受精、体外受精、顕微受精、代理母、精子提供、卵子提供、クローン人

間、出生前診断、選択的人工妊娠中絶、減数手術など、となる。中谷謹子『二一世紀につながる生命と法と倫理』（有斐閣）が、非常に綿密な資料研究を背景にして説得力のある理論を提示している。石井美智子『人工生殖の法律学』（有斐閣）が、新しい不妊治療と民法とのねじれを総合的に扱っている。金城清子『生殖革命と人権』（中公新書）、金城清子『生命誕生をめぐるバイオエシックス』（日本評論社）は、たくさんの話題について自己決定論に軸足を置いて論じている。仁志田博司編著『出生をめぐるバイオエシックス』（メジカルビュー社）も幅広く出生をめぐるさまざまな問題を取りあげているが、執筆者が臨床経験の豊かな小児科医、産婦人科医のベテランであり、なまなましい現実感がある。学会会議叢書『生殖医療と生命倫理』（日本学術協力財団）も多くの専門家の寄稿集である。加藤尚武『脳死・クローン・遺伝子治療』（PHP新書）は、これらの問題を体系的にとらえる視点を提示したつもりである。

（かとうひさたけ／京都大学大学院文学研究科）

中小出版社の販売・営業代行業者、ディストリビューター

菱川摩貴

米國書籍業界では、出版社と書店の間にディストリビューターとよばれる業者が存在する。今回は、売上で全米第三のディストリビューター、ナショナル・ブック・ネットワーク（NBN）社を中心に、米國出版界におけるディストリビューターの役割を取り上げる。

ディストリビューターとは？

まずディストリビューターとは何か？ 米國の書籍流通にはディストリビューターのほかホールセラーが存在し、日本語訳では両者とも「流通業者」または「卸売業者」であるため、混乱が生じやすい。しかし、ホールセラーとディストリビューターでは業務内容が全く異なる。ホールセラーが書店の注文に応じて書籍を配送する業務、いわば「取次」であるのに対し、ディストリビューターは契約を交わした特定の出版社のために、マーケティング、書店へのセールス、在庫管理、集金といった書籍販売に関わる雑務を請け負う。前者のホールセラー大手としては例えば、イングラ

ム社やベーカー&テラー社（B&T）が挙げられる。こうしたホールセラーや書店に向けて、ディストリビューターは何十社もの出版社の営業・販売活動をまとめて代行するのである。ちなみにNBNの最大の販売先はホールセラーのイングラム社で、グループ売上全体の約二〇％を占め、次ぎにバーンズ&ノーブル、ボードーズの二大書店チェーンが続く。

ディストリビューターの歴史はまだ浅く一九七六年、総売上で国内No.1のディストリビューター、パブリッシャーズ・グループ・ウエスト（PGW）社がカリフォルニアで産声を上げたところから始まる。それから一〇年後の一九八六年、専門書出版社ユニヴァーシティ・プレス・オブ・アメリカ（略称UPS。一九九八年にロウマン&リトルフィールド社に改名）の傘下にNBN社が設立された。設立当時についてNBN社長、ジェイムズ・ライオンズ氏は「出版業界で専門ディストリビューターの業務が正に本格化したころだった」と振り返る。従来、アメリカの出版界では大手出版社が自社業務のほかに、財務余力のない中小出版社

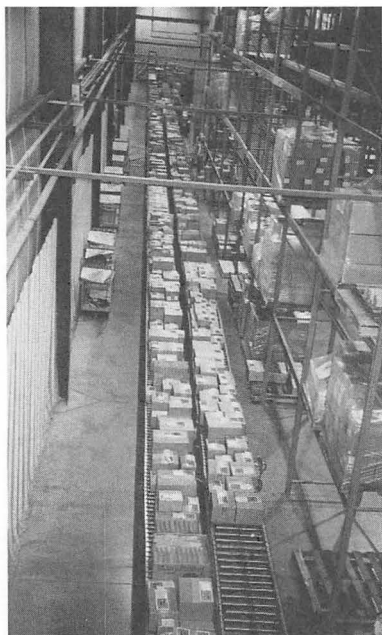


写真1 主要な顧客先流通センターには、NB Nの流通センターから毎週定期配達便がある。

写真2 梱包され、出荷待ちの書籍。
(NB N流通センター)

の営業・販売業務を代行することが多かった。ところが一九八〇年代、相次ぐ大手出版社の買収・合併で、代行サービスを取り止める大手出版社がでてきたのである。NB N社の親会社であるUPSグループ内の出版社も一九八五年、大手出版社の買収を契機に、営業・販売活動を代行してきた出版社を失った。こうした経験から「大型チェーン店に売り込みたいが、代行サービスをする大手出版社探しに苦労している中小出版社が他にも多いはず」(ライオンズ氏)と踏んで、ディストリビューター業務専門のNB Nを立ちあげたのである。

NB Nの売上と代行する出版社数をみると、ディストリビューターを介した流通ルートが年々成長していることが伺える。NB N過去数年の売上は、一九九八年三四〇〇万ドル、一九九九年四三五〇万ドル(推定)と着実に増加し、今年は五〇〇万ドルを超えると予測される。代行サービスを供与する出版社もここ一年半で七五社から八五社と増えた。各出版社の年間売上は五〇万〜八〇〇万ドルと中堅規模。児童書とコンピュータ関連本以外の一般書籍を扱っている。

NB Nマーケティング担当部長ミリアム・バースさんは、ディストリビューターの役割が年々増している背景に、相次ぐ大手出版社の買収・合併と書店チェーンの拡大があるとする。まず買収・合併で巨大化した大手出版社がコスト面から少数数の新刊書を控えた結果、中小出版社にも新しい出版機会が巡ってきた。一方急拡大した「大書店チェー

ン側でも、巨大な店舗を埋めるためにベストセラー本のほか、息の長い少数数の書籍も必要としている。しかしチェーン店にとって、二万五〇〇〇社を超える全米の出版社一社一社との個別取引は手間とコストがかかり過ぎる。そこで何十社もの出版社の販売をまとめて扱うディストリビューターが重宝がられ、役割が増しているというのだ。

地方出版社が全米規模で本を売り出し、ベストセラーを生み出すのに、ディストリビューターの存在は決して見逃せない。例えば、一九九七～一九九八年全米で爆発的に売れた新人作家チャールズ・フレイザーの小説「コールド・マウンテン」は、ボストンの出版社アトランティック・マンスリーから刊行され、国内No.1のディストリビューター、PGWが営業業務を代行した。PGW社長のチャーリー・ウィントン氏は同書成功の一因として、PGWが取引先書店と頻繁に連絡を取合い、的確に追加注文に応えていった点を挙げる。

新刊の売込み・販売

では具体的にディストリビューターの代行業務内容を見てみる。

まず、売込み・マーケティング活動だ。米国出版業界では各出版社の「セールス・レップ」の売込みとその成功が新刊売上の鍵を握る点を前号で説明した。NBNでは二人のレップが、出版社八五社の売込みに携わっている。彼

らは書店に売込む前にセールス・コンフィランスとよばれる会議で新刊情報を入手する(注)。会議は年に三回、次の刊行シーズンが始まる約四ヶ月前に催され、そこでNBNのレップは各出版社の編集者やNBNのマーケティング担当者から新刊書の説明を受ける。さらに同会議は各新刊の販売戦略を、本の作り手側である出版社と売り込み側のレップが検討する重要な戦略会議の場でもある。取引先書店の要求や好みを熟知しているレップが、本の装丁、書名、販売促進方法、ターゲットにする読者層などについて出版社やマーケティング担当者にアドバイスし、必要なときは変更を薦める。特に大口顧客を抱えるレップのアドバイスは貴重だ。NBNで最大手書店チェーンのバーンズ&ノーブル(B&N)や大手ホールセラーB&Tなど五つの大口顧客を担当するレップ、スペンサー・ゲイル氏は、出版社に変更を薦めた例として一九九九年四月に刊行されたフィクション「The Re-Appearance of Sam Weber」(ジョン・ササン・スコット・フクア著)を取り上げた。一一歳の少年サム・ウェバーが父親失踪後の困難を一つ一つ乗り越えていく過程を描いた同書の読者層を、出版社側は十代の中高校生に設定していた。しかし原稿を読んだゲイル氏が、十代を超えた読者にも広く受け入れられると判断、出版社に勧めた結果、同書の読者層は大人向けに変更され、また装丁も修正された。「全米の出版社から売り込みをうけるB&N本部バイヤーは毎日似たり困ったりの新刊書を三〇〇点以上も見ている。その中で、何故NBNグループの新刊



写真3 ペンシルベニア州にあるNBNの流通センター。親会社の出版社、ロウマン・リトルフィールドの流通センターと、両社のオフィス空間も合わせると計1万5,400スクエア・フィートの広さになる。



写真4 NBNの流通センター内部。出版社85社の全出版物、計約7,000点、600万冊の在庫が保管されている。

書が他社より売れるかをバイヤーにアピールするには、適切な読者層の設定から、装丁や書名、マーケティングが必要」とスペンサー氏は強調する。

NBNマーケティング担当部長のバースさんは、セールス・コンフィランス前から各出版社と綿密な打ち合わせをして、マーケティング・販売促進プランを練る。バースさんいわく、「新刊書Aを初版二万五〇〇〇部売って下さい」といってもレップは動かない。新刊書Aに出版社はいくら販売促進費を使い、どこに広告を出し、著者はどういった販売促進をするのか、例えばテレビ出演かラジオ出演が決まっているか、また書店周りをするならどこの都市に行くかといったプランを提示しないと、レップは自分の担当書



写真6 在庫を確認するNBNの在庫管理部。同センター内では、注文品の仕分けを効率化するため、書籍を在庫の回転スピードに応じて配置する。書籍一点一点の回転率を調べ、それに応じて配置を変えるのが、同在庫管理部のメンバーである。

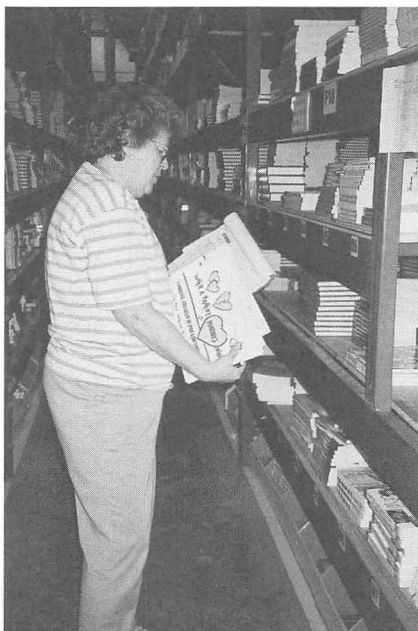


写真5 大手ホールセラーのベイカー&テイラーの伝票を見ながら、棚から注文書籍を集めるNBN従業員。2,000冊を超える同注文を一人でこなすのに約2日かかるという。

店に売り込めると確信できない。こうしたプランを練った後さらにレップからのアドバイスを受け、出版社と具体的なマーケティング戦略を決めていくという。

例えば、NBNと契約するワシントンDCの出版社、レグナリー・パブリッシングは、翌年四月～八月に刊行予定の新刊書一〇点につき、一〇月末にすでにNBNと会議を開き、装丁からマーケティングに使うメディアの種類や販売促進費までNBNからアドバイスを受けていた。同出版社では主にノンフィクションを扱い、しかもニュース性の高い内容が多いため、メディアの中でもテレビとラジオにターゲットを絞り、発売七ヶ月前から原稿の一部を送って働きかけを始めている。「タイミングが売り上げを決める」とパースさんはいう。書店は仕入れ後九〇日経てば返品が可能になる。例えば新刊がメディアで紹介されていても九〇日を経過していれば書店の棚にない。売上のチャンスを逸してしまうのだ。マスコミに早めに取り上げてもらうには刊行の数ヶ月以上前からマーケティング戦略を展開する必要がある。そして何よりもレップにとって、著者のテレビ・ラジオ出演が早い段階で決まれば、各出版社の売り込みが集中する。チェーン店本部のバイヤーにアピールしやすい。

また財テクやビジネス・マネジメント関連本を手がける出版社、カプリンガー・ブックス&ビデオのデビッド・ハリソン担当部長は、本のアイデアが浮かん段階でNB Nに相談するという。市場の状況から売れるか、売れないか、売れるならその部数と売込み費用についてNB Nから見積もりとアドバイスを受けてから、予算を組み、著者を探して最終的に出版にこぎつける。

在庫管理や集金も

在庫管理も、ディストリビューターにとって重要な業務だ。NB Nではペンシルベニア州に流通センターを構え、そこで八五社全社の在庫を管理している。九万五〇〇〇スクエア・フィートの建物には、約七〇〇〇点、六〇〇万冊の書籍が保管されている。この春にはさらに九万五〇〇〇スクエア・フィート増やし、計一九万スクエア・フィートに増床した。同センターでは各タイトルにつき販売冊数四ヶ月分の在庫が保管されている。在庫が四ヶ月分を切った書名は同社の在庫管理システムによって自動的にはじき出され、それをNB Nが各出版社に毎週通知するしくみをとっている。しかし通知を受けた出版社が自動的に追加在庫をNB N流通センターに送るわけではない。「Low Stock Report」と呼ばれるこの通知には書名だけでなく、現時点の在庫冊数やバック・オーダー、四ヶ月間の販売冊数、発売日が記載される。NB Nの担当者はこうした数字を見比

べ、追加在庫、または増刷が必要かどうかを出版社に助言し、それを受けて出版社が判断するのである。NB Nとしても余分な在庫は抱えたくない。「余分な在庫を抱えれば、(それだけ他の著書でNB Nが)儲ける機会を失う」(NB N副社長アーブ・マイヤーズ氏)というのが同社の立場だ。

また同社では昨年八月に二〇〇万ドルかけて新しく在庫管理システムを設置し、各出版社に毎月詳細なデータを網羅した在庫レポートも提供している。月間レポートは、売上データが各タイトルごと、また販売先ごとにそれぞれ整理されている。これにより、出版社はどの販売先に自社のこういった書籍が売れているか一目で把握でき、将来のマーケティング・販売促進戦略策定に役立てることができるという。

ディストリビューターは出版社に替わって集金業務も行うが、これこそNB N当社にとって「成功の鍵を握る業務」といわれる。返品が増えるにつれ、集金業務が困難を極めてきたからである。書店に送るインボイスでは仕入れ後の三〇日以内に支払いとなっているが、あらかじめ返品を予測する書店側は、返品が可能になる九〇日以降まで支払を遅延するのが現状。従ってNB Nでは一四〇日支払が平均という。関係者は一様に「ほとんど委託状態」と嘆く。一方NB Nの契約出版社は一四〇日間、支払を待つ必要はない。各出版社には、売上から代行業務料を差し引いた分が九〇日後に半分、一二〇日後に残りの半分がNB Nより払われるシステムになっているからだ。従って書店による支

払遅延は出版社ではなく、ディストリビューターであるNBNのバランスシートに直接影響を及ぼす。こうした支払遅延問題や数パーセントといわれる薄利もあって、ディストリビューター業界は生き残りが難しいといわれる。逆にそんな御時世だからこそ、中小出版社にとって、ディストリビューターがますます貴重なビジネス・パートナーになってきたのである。

こうした一連のNBNのサービスに対し、各出版社は契約内容によって多少変るものの、大体各社売上上の二二―七七を代行業務料として支払う。

外国の出版社も顧客に

NBNでは最近海外の出版社顧客層が広がりつつある。この背景にインターネット書店の拡大があるという。従来イギリスなどの英語圏出版社は、米出版社に米国での出版権利を売り込むことができた。しかしこうした国別に結ばれる国際出版のしきたりが、アマゾン・ドット・コムのようなインターネット書店の登場で次第に通用しなくなってきた。好例が、昨年「ポケモン」と並んで米児童に爆発的人気を呼んだ、英国作家J・K・ローリングによる児童書「ハリー・ポッター」シリーズ（一―三巻）だ。本書は発売日までにしびれをきらした米読者がネットのアマゾン英国社から、本土イギリスで数ヶ月前に刊行された英国版を次々と入手した点で業界に波紋を投げかけた。こうした事情か

ら英国出版社もNBNのような米国のディストリビューターに代行業務を委託し、直接、米書店に売るようになってきた。特に、宣伝、販売促進といったアメリカ独特の本の売込み方を知らない海外出版社に、NBNはそのノウハウをアドバイスする。

読者が欲しい本にアンテナを巡らせ、契約先出版社が持ち込む出版のアイディアや出版物にアドバイスする。市場の状況から大量に売れると確信する本には、出版社に大々的な売込みも薦める。販売機会を逃さないために、取引先書店にも絶えず目を配り、書店の販売・在庫状況を確認する。契約先出版社そして、自らの利潤を確保するには、適正在庫を心がける。中小出版社、そして海外出版社のビジネス・アドバイザー的役割を担いながら、出版社と書店の橋渡し役を務めるディストリビューターは、いまや米国書籍流通の貴重な一プレイヤーである。

（ひしかわ・まき／米国ワシントンDC在住）

（注）

セールス・コンフィランスは、ディストリビューターに限らず多数のセールス・レップも抱える大手出版社も行う。

「新しい日本史の読み方」

網 野 善 彦

はじめに

敗戦後、半世紀以上の年月が経過し、二十一世紀を目前にした現代、人類の社会が大きな転換期に差しかりつつあることは、間違いないと言わざるを得ないと思います。

よく言われることだと思いますが、いまや人類の社会は自らを滅ぼし得る力を自分の内にはらんでいます。そういう条件が、否応なしにつくりだされてしまったのです。すでに人類の社会自体が、若々しい青年時代、多少の犠牲はあっても自然を開発して生産力を高め、豊かになっていけばよいと考えられていた青年時代を間違ひなく超えて、熟年とまではいかないにしても、壮年時代、つまり大人の時代に入りつつあることは間違ひありません。すでに内部に自分を滅亡させる力、死に至る力を持っ

ているわけですから、うっかりすれば頓死してしまう危険すらありますが、慎重に生きていけばまだまだ十分に長生きができるという状況に立ち至っていることは疑いない事実です。その意味で我々自身が現在どういう地点に立っているか、これからどう生きるべきかは、我々のすべてにとっての大問題であり、正確な自己認識を持つ必要が非常に大きくなってきた時代と言っても言い過ぎではないと思います。

歴史認識の見直し

最近、日本人の歴史認識についていろいろな議論が盛んに行われているのも、こう考えれば決して不自然なことではありません。

敗戦後、私自身も歴史教育に携わってきましたが、戦前の「皇国史観」と、神話を事実として教育してきた歴史を克服するために、歴史研究者、歴史教育者がそれぞれに努力を重ね、戦前の歴史教育よりもはるかに事実則した、学問的な研究成果に基づいた教育を行ってきたことは間違いないと思います。それが現代日本人の常識の枠組み、つまり現在の日本人の歴史像、日本社会像を根底から支える形でいままです強い力を持ってきたといえます。

しかし、最近、私はどうもそうした戦後歴史学の描いてきた歴史像、日本社会像の枠組みそのものが確実に崩れ始めていると考えざるをえなくなってきたのです。これまで疑われることもなく、また、不動のものと考えられてきた「常識」それ自体成り立たないことが、明らかにになってきているのです。そして、そういう事態が生まれてきたこと自体が、現代の時代状況そのものの生み出した問題であり、その意味では否応のない動きと言わざるを得ないと思います。それでは、これまでの常識に代わるいかなる歴史像、日本社会像を我々が描き得るかという点、それはいまだに鮮明になったとは決して言えません。例えば、封建社会、封建制について、我々はこれまで当然のごとく決まったイメージを持ってきました。今でも封建制度の遺物、封建的な遺習のような言い方を我々がしないわけはないと思います。しかし封建制度とは何か、封建社会とは何かについて、「農民を封建領主が、経済的強制によって土地所

有を背景に支配し、地代を収取る」のを、基本的な生産関係とする社会とこれまでとはとらえてきたのですが、もはやこれだけで、日本の中世社会を理解することはできなくなったと私は思います。

歴史教科書をめぐる議論

それでは、それに代わっていかなる時代区分を提出したらよいかということになると、これは必ずしもはっきりしたことをいえるような状態にはなっていません。そこに最近、歴史教科書をめぐるいろいろな論議、いわゆる「自由主義史観」と言われる人たちの主張の出でくる背景があると思います。もとより私は「自由主義史観」の立場にくみするものではありませんが、ただ、これを頭から批判するだけではなく、戦後歴史学それ自体の根底からの反省、自己批判を経た上での批判をしなくては、本当の意味で提起されている問題そのものにもこたえることができないのではないかと考えています。

そういう気持ちになってからいろいろ考えることが多く、本にも書いたり、あるいは大学を辞めてからは何か歯どめがなくなって、あちこちで話をしたりすることが多くなりました。そうした機会をとらえて至るところで言っていることですが、最近中学の教科書を見ましたところ、「縄文時代の日本」「弥生時代の日本人」という項目が立っており、弥生時代のところには「倭」について解説されており、括弧して「日本」と書かれています。つまり、「倭」と「日本」「倭人」と「日本人」とは同

じだという前提で、縄文時代から日本を考えることが可能だということらえ方だと思っています。

私は日本史を都立北園高校で十一年ほど教えてきましたが、昔教えた生徒たちが—今や五十以上の年齢になられた方々—昔の教師にもう一度話をさせようということで、最近呼び出されました。そこで、私は何の前提もなしに日本史を教えてきたことと自体、基本的な点で皆さんの歴史認識を大変誤らしたものがあつたという自己批判から始めたのです。それがまさしく今の問題であり、私はそのころ「原日本人」から始めて、「縄文時代の日本」、「弥生時代の日本人」を説明し、やがて水田農耕を基礎にした律令国家が成立するという話をしてきたわけですから、しかしこの常識自体に大変大きな誤りがあつたことを、ある時期から気がつき始めたのです。

「日本」という国名が決まったとき

「倭」と「日本」、「倭人」と「日本人」とは決して同じではありません。この点はもっとはっきりと強調される必要があります。それは「日本」という国名がいつ決まったかという問題と非常に深いかわりがあります。

大学で短大の諸君を十数年教えておりましたが、終わりの七八年ころからこのことに気がついて、「日本」という国名のきまつたときを、何年というのは無理だろうから、何世紀か数字を書いてくださいと言って、小さな紙をくばって書かせてみました。

最初はびっくりしたのですが、多数派が全然いないのです。紀元前三世紀から始まって、十九世紀から二十世紀までいたのです。二十世紀と書いた人をさしてみましたら、「日本国憲法だと思えます」ということでした。「紀元前一世紀というのは、何ですか」と聞きましたら、これも多少はやはり覚えていたわけですが、「分れて百余国といわれたのは、あのころではないでしょうか」ということでした。こうした質問をそれから毎年、講義の最初に七、八年つづけてやってみましたけれども、結果は同じでした。これは短大だけではなくて、京都大学の経済学部の子生さん百人を相手にして質問をしたときも、全く同じ結果でした。

また最近、建設省や道路行政の役所から呼ばれて話をする機会がありましたので、古代日本国は、真っ直ぐな大道を必死で作り、実際かなり作つた。けれども、人民の支持がなくなつたとたんに二、三十年、長くても数十年でこの道は荒廃してしまつたという話をしに行つたことがあります。そのときの皆さんにも聞きましたし、ついこの間、通産省の輸出入局長との対談でも真っ先に、「日本という国の名前がいつ決まったかご存じでしょうか」と聞きましたら、やはりご存じではないのです。国家・国民を問題にされる方は最近多いようですが、「皆さんの言っている国家・国民が、日本国、日本人だとしたら、この国の名前はいつ決まったかぐらいはご存じで言つてらっしゃるのではありません」と聞きますと、「いや、知りません」という答えがえって

きます。新しい教科書をつくる会に入っている方に聞きましたら、「十九世紀」と言っておられました。

私が自己批判したのは、そのことを十数年教壇に立っていて一度も教えなかったことです。これは決定的な失敗であり、誤りでした。「日本」という国の名前がいつ決まったかについては日本史という以上、きちんと教えずに、何で本当の歴史を君たちに教えたことになったのだろうかと思ひ批判したのです。

現在の日本人のほとんど大部分はまだこのことを知らないと思います。歴史家はもちろん多くの方はご存じだと思いますが、六八九年、浄御原令の施行時が日本という国の名前、天皇という王の称号が公式に定まった時点だと思ひます。これは、多少の異論はあるとしても、大方の古代史の方のご意見が一致していると思うのです。重要なことは七〇二年に（当時の中国大陆の国家はもちろん唐帝国ですが、この時点で則天武后が国の名前を周に変えていました）日本列島から中国大陆に行ったヤマトの使いが、初めてそれまでのように「倭王」の使いというのをやめて、「日本」の使いと言ったのです。明確に国名を変更したわけで、当然なぜ国の名前を変えたのかという詰問を則天武后にされたのだと思ひます。

倭人と日本人

もし、ヤマトの支配者たちが則天武后自身が国の名前を変えた時点を選んで使いを送ったとすると、これは大変な政治的感

覚を持っていたことになると思ひます。それはともあれ、なぜそれまで倭王と言っていたのを日本国王と言うのかという質問に対して、使者がいろいろなことをいって弁解した発言の断片らしい記述が『旧唐書』の中に残っています。それを見ますと日本は倭国の別種と言った形跡もあります。

また、「倭」という字が悪いから変えたのだとも言ったり、小国だった日本が倭国の地を併合したとも言ったようですが、いずれにせよ、そこで初めて、それまで「倭国」と言っていた日本列島の国家が、「日本」を国名とすることを、中国大陆の帝国に認められたことは間違いないと思ひます。それ故、それまで『倭人伝』『倭国伝』だった中国大陆の「史書」がそれ以後『日本伝』に変わるのです。その意味で「倭」と「日本」とは実態の上ではもちろん、名目上でもはっきりと違い、そしてそこで国名を変えたことの意味には、非常に大きな意味があったのです。

日出るところ

「日本」という国名が中国大陆から見て日の出る方向、東の方向であることを意味するのはほぼ認められたことだと思ひます。たしかに日本列島側の人間にとっては、東の側に位置することは、非常によい方向にいるということになります。ご承知のように「日出るところの天子云々」の国書の流れをくみ、「倭」を「日本」に変えたということは、中国大陆の大帝国に対

して、小さくても肩を並べた独自の帝国になろうというぐらゐの意図を持ってこの国名転換が行われたことは、間違いないと思います。ですからこのときのヤマトのリーダーたちの緊張感、想像を絶するものがあつただろうと思います。

日本国の周辺侵略

しかし、このように、中国大陆の帝国に肩を並べるという姿勢を持った日本国は、自らも周辺に対して侵略を開始するわけです。東北を侵略し、南九州を侵略するのです（この「侵略」という言葉を古代史家の笹山晴生さんは、かなり前から「日本国は東北を侵略した」とはつきり使っておられます）。東北人にとってはこの段階の日本国は侵略者で、東北人は決して日本人ではないのです。東北人、あるいは関東人が倭人であつたかどうかはかなり疑わしく、私はちがうと思います。

これは人種の問題にはすぐつながらないわけで、邪馬台国がもし畿内にあつたと仮定しましても、中部地方以东はまだ倭国の中に入っていないわけですから、倭人と言えるかどうかはかなり問題です。東北人は間違いなく倭人でないと思います。毛人という人々が関東にはいたわけで、縄文人の流れをくむ人々とみることもできるでしょう。

とすると、「倭人」と「日本人」とははっきりちがうと思います。日本国の支配下に入つた人を日本人と言うならば、関東人は「倭人」ではないとしても、「日本国」ができてからは日本人

になりますが、東北人はそうではありません。しかも日本国の侵略に抵抗しぬいて、ついに東北人は自立的な地域を確保したのです。東北の最北部、北緯四十度以北は十二世紀まで、まだ日本国の国制が及んでいない、つまり日本ではなかったことも証明されています。このようなことからみても「倭人」と「日本人」とを直ちに同じに見るようなとらえ方はやめるべきだと思います。

それはとくに韓国、中国との関係において考えなくてはいけないところで、韓国の人たちは、倭寇、壬辰倭乱、日帝三十六年が日本人によって我々が痛めつけられた三つの大きな事件、日本人の三大悪事だといえます。壬辰倭乱、つまり秀吉の朝鮮出兵は全くの侵略であり、一言の弁解の余地もありません。日帝三十六年も私は完全に頭を下げます。しかし「倭寇」は違ふのです。倭は日本と同じではありません。大体、日本国の幕府はこのときの倭寇に対して援助を与えるどころか、弾圧していたのです。最近の説では、朝鮮半島、濟州島の人たちと西北九州、瀬戸内海などの日本列島側の人たちが一緒に動いていたという説がかなり有力になっています。もちろん反論もありますが、少なくとも「倭寇」イコール日本人という考え方をするのは全くの間違いだと思います。

韓国の珍島に行ったときに、倭人イコール日本人という認識が誤りであるということを、向こうの方に話したことがあります。しかし、我々自身も「倭人」は「日本人」だと思っている

以上、韓国の見方を批判することも不可能だと思えます。倭人と日本人とは違ふのであり、「日本」という国の名前が決まる前には日本は存在しなかったのです。そうだとすると「弥生時代の日本人」とか、「縄文時代の日本」という表現はすべきではないのです。これは縄文時代から日本が存在したことを若い生徒たちの頭に植えつけてしまうからで、縄文時代には「日本国」は存在しないのですから、日本人もいないのです。

陸上交通より海上交通が基盤

もう一つ、前近代には海と川の交通が列島社会の基本的な交通路であったということを強調したいと思えます。現在、我々は車、鉄道などの陸上交通を基本にして考える発想にすっかりなじんでいますから、それに従って日本列島の諸地域のあり方を考えるのが普通になっています。私も陸上交通で能登半島へ最初に行ったとき、遠くて大変辺鄙なところで、田畑も少なく中世においても流人の地のような、後進地域だったので、時国、則貞のように中世の名の名前を名字に名乗るような家があり、たくさんのお下人を従えた大農奴主経営が行われていたと考えていたのです。この発想の出発は、一つには農業、一つには陸上交通を基本に考えているからであり、陸上交通を基本に考えれば島は孤島、離島になりますし、半島も「陸の孤島」になるわけです。

そしてその発想から「島国意識」、つまり「日本は島国だから

孤立している」という発想が生まれてくるのですが、これは基本的につくられた虚像であるとはっきり申し上げてよいと思います。富山県をつくった日本列島を引っ繰り返している地図がありますが、それを見ると日本海は湖のように見えます。視点を變えて見るとずいぶん地図も変わって見えるものだというところを、その地図を見たときに非常に強く感じました。サハリンとアジア大陸との間はきわめて狭いのです。さらに対馬と朝鮮半島の間も狭く、対馬から朝鮮がよく見えるくらいです。列島は一種の架け橋に見えてきます。沖縄まで含めてみますと、日本列島はアジア大陸の北から南までを結ぶ架け橋だったと思います。そしてそう考えてくると北海道、本州、四国、九州、沖縄だけをまとめて、「孤立した島国」というのは、どう見てもおかしいことになります。

北海道と本州との間をもし人が動いているならば、サハリンと北東アジア、サハリンと北海道との間に人が動かないということは絶対に考えられません。北九州から対馬まで船によって、縄文文化が渡っているならば、対馬から朝鮮半島に文化が渡らず、朝鮮半島から縄文時代に何らの影響もなかったというのは、全くおかしい話です。にも拘らず北海道、本州、九州、四国、沖縄で「孤立した島国」という考え方が生まれるのは、欧米の列強の圧力の中で、その範囲を領土として国民国家を形成しようとした明治政府がつくりだし、我々にすり込んだ「虚像」なのです。海は決して人々を孤立させるだけの役割をしているわ

けではなく、人と人を結び付ける役割もしています。荒れたときの海は確かに恐ろしい世界になりますが、晴れた平穏な海ぐらい快適で滑らかな道はないと言ってもよいのです。時間をかけ日通をしつかりと見て動けば、海は非常に有効で安定した交通路になり得るのです。

陸上交通が基本だったのは、「日本国」が成立した当初のこと、都を中心に真っ直ぐな十数メートルの幅の道路を作ろうとしています。奈良時代を通じてこの陸上の道が交通体系の基本にされたことは確かですが、数十年で荒廃してしまっています。明治以後の時刻表には、船の時刻表が非常にたくさん入っています。すし、高度成長期に入る前には、水上交通は意味を持っており、明治前期までは海や川の交通が大きな役割を果たしていましたが、兵員と物資の輸送を安定的にするという軍事的な理由で陸の鉄道に基本を置いた交通体系がつくられ、以後、現在まで約百年間が陸上交通中心の時代になります。とすると、日本国成立後、千三百年が経過していますが、その中で陸上交通が中心だったのは、わずか二百年足らずで、何万年もつづいている長い日本列島の社会の歴史の中では、陸上交通よりも、川と海の交通が主たる交通であったことは間違いありません。その意味では列島の社会は、川と海の役割を度外視しては絶対に理解できません。そして海は列島外の地域とのつながりにも当然大きな意味を持っています。アジア大陸と日本列島との関係は、はるかに古い時代には列島は陸橋で大陸につながっていましたが、島に

なつてからもアジア大陸を北から南につなぐ架け橋の機能を日本列島は果していたと思います。

アイヌと沖繩の役割

そのことの意味を今まで我々が本当に理解していなかったこと、北海道のアイヌを文字も知らない、農業も知らない未開な民族と考え、また琉球、沖繩の交易の上で果たした役割の大きさを正當に評価してこなかったことが深く関係していると思います。最近の研究でアイヌが極めて活発な交易民族であったことが知られるようになってきました。十三世紀ころにアイヌはサハリンへ大挙して移住をし、さらにはアムール川から北東アジアで交易活動を展開したことが明らかになってきたのです。そうしたアイヌの動きの中で、モンゴルの軍隊がサハリンに四回も侵入していたことも証明されており、アイヌが当時の日本国——本州、四国、九州と、北東アジアとの交易をさまざまな形で媒介をし、大きな役割を果たしていたことが最近明らかにされてきたわけです。まだまだこれから解明されるアイヌの問題はたくさんあると思います。その一つとして、アイヌは漁労はやっているけれども農業を放棄するのですが、これは決して「未開」に逆もどりのではなく、交易によって十分食糧が確保できる条件が整ったので農業を放棄した、と考えたほうがよいようです。また焼物を作らなくなったのも、いろいろな焼物や漆器を本州や中国大陸から交易によって購入することができるようになったからだ

いうことも明らかになっています。

中世から江戸時代を通じて、北東アジアと日本列島、本州、四国、九州とのかかわりを考える場合、アイヌは度外視できなくなっているのです。沖縄については、あらためて強調するまでもなく、東南アジア、中国大陸南部から朝鮮半島、日本列島の間の交易を通じて琉球王国が形成されたこともよく知られています。

私が高校で教えていた六十年代前半までの教科書には、アイヌと琉球のことはほとんど書かれていませんでした。私もようやく高校教師の終わりのころ（一九六〇年代後半）に、そのことに気づき、多少の勉強をを始めました。沖縄がまだ日本に復帰をしていないころでしたから、教科書もそういう形になってもしかたなかったとも言えます。しかし、日本国を考える場合、琉球とアイヌの問題を度外視しては正確な理解ができないことは間違いないと思います。日本は、島国で孤立しており、それゆえに極めて単一で斉一な民族であるというところえ方が、六十年代のころには明らかにありました。これは当時、アメリカの占領下において、歴史教育を通じて日本国民としての誇りを強調しようとする方向があったのですが、そのことが逆にアイヌと琉球を切り落とす結果になったと言わなくてはならないと思います。

日本列島の諸地域は一樣でない

そのように日本列島がアジア大陸の南と北を結ぶ架け橋だったと考えますと、そこを人も物も絶えず動き、往来していたととらえる必要がでてきます。おのずと日本列島のそれぞれの地域の個性が、これまで我々が陸上交通を基本として、考えてきた列島の諸地域のあり方とは全く違った姿に見えてきます。

例えば能登半島や、瀬戸内海の島々は、陸の孤島あるいは、離島というところえ方をされてきました。しかしそれは陸上交通中心の見方であり、海に視点を置いて考え直してみますと、能登半島は江戸時代までは商業・流通・海上交通が非常に活発な、大変お金持の地域であったと評価をすることができると思えます。紀伊半島にせよ、房総半島にせよ、半島はいずれも海の交通の中では重要な役割を果していたのです。

もう一つ注意しておく必要のあるのは、日本列島の地域が決して一樣でないということです。列島西部と列島東部とは大きな差異があります。被差別部落の問題に端的に東西の社会の差異が最もよく現れていると思います。琉球には被差別部落はありませんし、アイヌにもありません。

神奈川大学ではこの問題を必ず教えるようにしていましたが、「同和問題を知っていますか」と聞きますと、「知っている」と手を挙げるのは百人中四、五人しかいないのです。手をあげた人に「どこの出身ですか」と聞くと「大阪」「山口」「島根」「三重」のような西日本です。手を挙げる人に、「本当に同和を知

らないの」と聞くと、「ドウワって」と首をかしげるのです。

「同和だよ」「おとき話？」と言うのです。これには私も正直のところびっくりしました。神奈川県は決して同和教育をやっていないわけではないのですが、一生懸命にやっている県と比べると、神奈川県は広い範囲では同和教育はやっていないためだろうと思います。

しかし、大阪の大学で「同和問題を知ってますか」などと聞いたら、「何をいまごろ寝ぼけたことを言っている」と言われるに相違ありません。このことは東西のこの問題についての基礎経験がまるで違うことをはっきり示しています。その意味で列島の西部と東部とは社会のあり方が違うのです。東と西の社会が違ふことが前提となり、日本国ができてからも東と西とはさまざまな差異があります。日本という国の名前が千三百年続いたのは事実です。しかし、国の名前については隣の韓国と朝鮮が統一したときにどういう国名にするかについて、本気の議論が行われるに相違ありません。国の名前は、そのくらい重みのある問題だと思うのです。日本人がこの問題については全く鈍感で、何万年も前から日本があり、いつまでも日本という国名が変わらずにつづくという茫漠たる意識しかもっていないのは、確かに日本という国号が千三百年も変わらなかったという背景があるからだと思います。しかし、国名が変わる可能性が全くなかったわけではなかったと思います。そしてそれは東と西の差異に起因しています。

例えば関西と関東という言葉は鎌倉時代から始まるのです。

鎌倉幕府は自分で国の名前を決めませんでした。自分たちのことを関東と呼んでいます。それに対して京都のほうを「関西」と呼んでいるのです。これは確実に東に視点を置いて見た西です。関東は、京都から見て関所の東だから、関東なのですが、関西という言い方は、東から見て関所の西を指すわけです。つまり、日本列島に二つの視点、二つの中心がはっきりできたことを、このくらい明瞭に物語っている事実はないと思います。それがさらにもう一歩進んで、完全に別個の国家になる蓋燃性も皆無ではなかったと、私は思います。このように、日本という国の名前についても、それを相対化して見て、われわれ自身がこの国名を変えることができるのだという認識を持つことにより、むしろより深く日本を理解することが可能になると思います。

百姓イコール農民ではない

もう一つの私の自己批判は今でも教科書では直ってはいないと思いますが、百姓と農民が同じ意味だと見ることの誤りです。ご承知のことと思いますが、現在の中国や韓国では百姓という言葉を見ても農民とはだれも考えていません。この文字には農民の「の」の字の意味も入っていないのですから当然のことです。現在の日本人だけが全く違う使い方をしているのです。短大でこの問題を話したときに、中国の男性の留学生に指さして

「百姓をあなたは何と訳しますか」と聞いてみたのです。彼はしばらく首をかしげて考えて、「普通の人」と言いました。とてもいいことを言ってくれたと思ひ、隣にいる日本の学生に「百姓と聞いて君は何を考へる」と聞くと「農民、お百姓さん」とだれをさしても言うわけです。中国人の留学生に皆こう言っているけれども、「どう思ふ」と言ってみると、「僕はそれについて、実は日本に来てから大変に違和感がありました。なぜなのでしょう、先生」と聞かれました。韓国も同じなのです。日本人がなぜ百姓を農民と思ひ込んだのかについて、最近ずっと考え続けました。

いつから日本人が百姓を農民と思ひ込んだかについて、最近私は山梨県史の調査をしているうちに、たまたま、おもしろい、びっくりするような事実につかりました。山梨県では『山梨県史』という本をずいぶん前に作っておられますが、その中に明治七年（一八七四）、壬申戸籍に基づいた郡別、職業別の人口統計が県令から内務卿に上申されたときの文書が掲載されていました。山梨県には山梨郡、八代郡、巨摩郡、都留郡の四つの郡がありましたが、その中で都留郡は、九十五％が「農」となっているのです。都留郡は農地が最も少ない地域なのですが、なぜこういうことが起こるのかが大問題であり、まずこれが我々が日本を農業国と思ひ込み、日本の人口の大部分が農民だと考へる常識の数字上の背景となっていると思ひます。あまり田畑の多くない山梨県で、農民の比重がもっとも少ないとされてい

る山梨県でも七十七％で、全体として、九十％以上が山梨県では農民だということに明治七年の統計ではならざるを得ません。

この統計の二年前に壬申戸籍がつくられており、この数字がそれに基づいていることは間違ひありません。現在、壬申戸籍の原本は見られない状態なので、たやすく確認することはできないのですが、私はこの壬申戸籍に基づく数字に決定的なからくりがあると思ひます。最近、二神島という瀬戸内海の小さな島の壬申戸籍の草稿を見る機会に恵まれました。この島は、二つの小さい山が並んでおり、二柱の神様がいるとされている島で、完全な海村で、田畑はごくごく少ないと思ひます。しかし、壬申戸籍では百三十戸あり、その中で一軒がお寺、一軒は書きおとし、のこりの百二十八軒はすべて農になっているのです。これは間違ひなく百姓を農民に読み替へたとしか考へられません。この帳簿をもし私が研究室で見たら、ああ、大変農業の発達した島だと思ひてしまふに違ひありません。山梨県の都留郡も同じです。都留郡は、九十五％が農業だという農地がたくさんある郡だろうなと思ひてしまいます。こういう形で壬申戸籍は百姓水呑を農民と読み替へたと私は思ふのです。

伊豆の白浜の明治十五年（一八八二）の戸籍が、つい最近までありました神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されていましたので、調べてみたところ、戸数は調べていませんが、やはり全部農民です。漁民という範疇はないのです。これは「土農工商」という全くの虚構にしたがつて、明治政府が百姓を農民に

してしまった結果です。このころは既に「百姓」という言葉にやや差別的な臭いが入っていたのだと思います。そこでこれを平民という身分にして、「百姓と水呑の職業は全部「農」にした」と考えられます。

実際、都留郡の吉田は、中世から都市であり、食糧を買っているところでは、富十信仰に関わる御師がたくさん住んでいたところで、中世後期からここでは、穀物の値段が高くなると飢えるのです。穀物が安く商売がうまくいくと富貴になると言われています。『勝山記』『妙法寺記』という記録を見ますと、吉田はすでに中世からお金の世界になっていることがよく分かり、まぎれもない都市なのです。

ところが、吉田には水呑が非常に多いのです。水呑と百姓の比率を比べると水呑のほうがはるかに多いようです。こういう水呑も「農」にしてしまったのだと思います。教科書には水呑は、土地を持ってない貧農あるいは小作人とありますが、そうだとすると吉田は大変まずいことになります。また教科書には本百姓は、中堅の農民である、とありますが、そうだとすると吉田の商人、手工業者はみな百姓か水呑になっていますから、全部農民にされてしまうのです。しかし、都留郡は結構豊かで、甲斐絹という絹を作る養蚕地帯として非常に有名です。養蚕・生糸地帯として郡内は山梨県の中で抜群の地域だったと思います。

そういうことで、明治のときに百姓イコール農民という虚構

が制度化されてしまったのです。まさか明治政府がこれですべての政策を立てたわけではないと思います。ただ、こういう基本的な統計が公式に提出されている以上、全体として「農」以外の生業は、政府の要路者の目からも落ちる可能性が大きいことはまず間違いありません。研究者の目からもほとんど落ちていったと言わざるを得ないと思います。実際、私自身がかつてはそうだったので、反省の意味も込めていっております。

では江戸時代の百姓はすべて農民だったのか、また幕府・大名が百姓は農民だと思っていたのかといいますと、これはそうではないのです。「農民」と言う言葉はこの時代はあまり使いません。「農人」という言葉がもっとばら使われていますが、「百姓」の中に「農人」という生業が商人などとならんで出てくる史料がたくさんあるのです。例えば、周防の竈戸の関の流れをくむ上関では、浦方、海辺の百姓八十八軒のうち、農人が十二軒、十三・六％、商人が五十四軒、六十一・三％、船持が三軒、船手廻船が三軒となっており、水呑にあたる「門男」百七十八軒のうち、農人はゼロ、商人が六十八、船持が十八となっており、百姓、水呑（この場合には、門男）の下に職業別の分類が江戸時代でもされています。ですから、江戸時代の百姓は決して制度上、農民とは考えられていないのです。

村にされた都市

この職業別構成からみて、上関は、決して農村ではありません

ん。我々のふつうの常識ではまぎれもない都市です。実際、上関は港町としての機能を十分持っていたにもかかわらず、江戸幕府はこれを「村」の扱いにしているのです。下津井、倉敷も「村」なのです。能登に水呑（頭振）七十一％、残りの二十九％は平均「二三反しか田畑を持たない百姓で構成されている村があります。非常に貧しい村にみえますが、これは、奥能登の輪島、旧河合町村・鳳至町村の人口構成で江戸中期、享保二十年（一七三五）の数字です。天保十四年（一八四三）の人口は二万をこえるでしょうが、その中の鳳至町村の百姓、頭振（加賀・能登・越中の無高民、水呑）の職業が全て分かる史料がありますが、そのうち「農人」はゼロです。

頭振の中には、漆器の木地を扱っている木地屋、塗師、あるいは漆器の商人、素麺の商人、船問屋までいます。百姓の中には御塩廻船問屋もいます。二、三反持っている百姓は、公的な立場に立つ人が多いのだと思います。

輪島の大金持で最有力の商人や廻船人は、二、三反百姓だったり、頭振であつたと思います。「農人」はゼロで、頭振の中で、貧しい日雇いは約五百軒の中の七十軒ぐらいにすぎません。その比率は非常に低く多くの頭振は商人か手工業者です。

土地を持ってない人は貧しいと我々は考えがちです。「あそこは土地もなく田んぼもない山の中で、米の飯も食えない貧しいところ」とよく山梨で聞きます。この発想は少なくとも前近代の集落を見る場合には捨てておかないと、とんでもない間違いを

することになります。輪島の水呑（頭振）は土地を持ってないのではないのです。土地を持つ必要が全くない商人や手工業者、職人なのです。自分の仕事が忙しくて土地など耕している暇がない商工業者、あるいは廻船を持って松前まで行き来しており、土地を持つ必要など全くない船持が頭振になっているのです。これは輪島が制度的に村に定められたため、住民は百姓と頭振に位置づけられた結果です。

奥能登には百％頭振という集落があります。これは宇出津の新町ですが、ここは今いってみると、街路に沿って短冊型の地割で家が並んでいます。「うなぎの寝床」のような家で、京都の町並みを思い起こさせるような町並がみられます。元和二年（一六二六）に行政単位として認められた新町ですが、行政単位としては「村」でありますから、全員頭振（水呑）になっています。こういう頭振の比率の高いところは奥能登には非常に多いのです。とくに海辺にはこういう村がたくさんありますが、そこに巨大な真宗寺院が建てられています。地元の方は「能登には水呑が多くて貧しいのですよ」などとおっしゃるのですが、これにだまされてはいけません。実際にはこのような非常に豊かな水呑（頭振）がたくさんいた地域と考えなくてはなりません。農地は確かに少ないのですが、商業、手工業、あるいは海の廻船交易等々の非農業の生業に携わる人の比重が全体として高く、動産の面では非常に豊かだったと考えなくてはならないと思います。こういうところは日本列島にはいたるところにあ

るのです。越中の井波には瑞泉寺というお城のような真宗寺院がありますが、こども頭振が七十〜八十%いる都市です。越前の三国湊も「雑家^{ぞうけ}」といわれる水呑の非常に多い村です。

このように江戸幕府の制度は、多くの都市を村として扱い、町として認めたのは堺や博多などの都市も例外的にありますが、基本的には城下町です。奥能登最大の都市の輪島を村にしてしまふ制度であり、輪島や三国湊を村にされたら、ほとんどの港町が村にされてしまったと考えなくてはなりません。村にされると住人は百姓と水呑になりますが、実態はまったく変わらないのです。

通説では秀吉のころの「商農分離」によって、商人は全部城下町に吸収され、「兵農分離」で武士もみな城下町に集住したので、農村には商業的な要素がなくなり、自給自足に戻ったとされてきました。私は高校でそのように教えたことがありました。武士と百姓が分離されたのは間違いないかもしれませんが、町人と百姓を分離していたことも事実です。しかし百姓の中にも武士的な要素を持っている人ももちろんいますし、商人や手工業者も最初からたくさんいたのです。もちろん漁民もいますし、林業に携わっている人もたくさんいるのですが、そういう人たちが全部百姓の扱いを受けることになります。それから遊女もいるような港町が、村の扱いになってしまいます。もちろん中身はまったく変わらないのです。にもかかわらず、商人、職人がいなくなり、村は農村になったとして教えてきたことになります。こ

れはよく調べてこなかった歴史家の怠慢が責められるべきだと思います。百姓の実態がどうなのか、水呑が何かをきちんと調べておけば、だまされるはずはなかったのです。しかし、明治の統計（農七十八%）に古島敏雄さんすらだまされてきたわけですから、ずいぶん間違ったことを考えたり書いたりしてきたものだ、この年齢になってしきりに反省しています。今でも「農村」というと皆さん安心され、「村」といわずに農村といい、百姓はみな農民とされてしまうわけです。

村イコール農村ではない

しかし本当は農村などとは言えない村は非常に多いと思います。果樹栽培しかやっていないところも厳密には農村ではないと思います。中世では果樹も養蚕も農業とはっきり区別されてきました。しかし、果樹だけをやっているところも農村と言うし、養蚕を主としているところも農村と言って、何となく安心しています。この感覚は常識として日常の生活に深く浸透していますから、今は仕方がないと思います。しかし、学問的に正確に事態をとらえようとするならば、やはり考えを改める必要があると思うのです。

江戸時代の百姓の中には、農人、商人、職人等々がいます。そのうち農人の比率はやはり七十%から八十%ぐらいいるかも知れません。「百姓は農民でない」ということはもう半世紀前から分かっており、これは身分呼称であって、職業を表現する言葉

ではない。しかし、百姓の中には農人が多いのだから、事態は何一つ変わらない」と佐々木潤之介さんに私のいっていることは一蹴されましたが、確かに百姓の中の農人の割合は高いと思います。しかし、百姓がもし人口の八十%だったとすると、百姓の七十～八十%が農人ならば、百姓＝農民と思って八十～九十%が農民といっていたのとはちがひ、農人の比率は六十%ぐらゐに下がります。しかもその農人の実態をよく調べてみると、さまざまな「稼ぎ」のあるのに気づきます。

農間稼ぎ

農業の間の稼ぎとして、男は山に行って炭を焼き、薪を取ってくる。女は蚕を飼ひ、糸や綿をとり、木綿を作り、茶をつんでいます。そして、栗と柿とブドウなどの果樹が植えられています。山梨ではブドウは稼ぎの中に入っていますが、じつはこれは、農間稼ぎでなく、ブドウ間農なのです。ブドウの稼ぎが圧倒的に、必ず農を前に出しているのが江戸時代の特徴です。農間稼ぎになっている産物は全部売って稼ぐものです。果樹、炭焼、製塩、養蚕を農業から外して、田畑を耕して穀物を作るのを厳密な意味での農業というすると、農人の生活の中で、稼ぎは二十～三十%あると思いますから、農業の比重は五十%を割り四十%台になります。今まで八十～九十%だと言われていたのが、四十%台に比重が下がることになると思うのです。

荘園の年貢

中世の荘園の年貢は、決して米だけではありません。ただ田地に年貢をかけていますから、みな米だと思いこんでいたのですが、よく調べてみますと米年貢は三十八%ぐらゐです。『日本中世の百姓と職能民』（平凡社）に年貢の品目の分る荘園の数を表にしておきましたが、米年貢は三十八%しかありません。絹、布、綿、糸等々、織維製品を年貢にしている荘園は約二十九%強あります。米年貢を出している荘園は史料が多く、小さい荘園の多い西国ですから、大分、米に有利な数字になっています。こう考えてきますと、私は江戸時代に農業（厳密の意味での農業）の比重が全産業の中で五十%を切ると考えて全くおかしくなっていると思います。養蚕農家や果樹農家のような曖昧な用語、明治政府的な用語を使わないで、学問的に追求すれば、五十%を割ると私は思います。もちろんだからといって農業が大切ではないなどと言ふつもりはありません。ただ、今まで九十%が農業だと思って研究していたのに対して、もし五十%だとしたら、その間の四十%の部分を我々は今までほとんど見落としてきたことは事実です。このことを十分に考え直してみる必要があると思うのです。

荘園の実態

今まで私は荘園の研究をしてきましたが、やはり田地と畠地と在家だけに目をとめていました。実際私が若いころに作った

表を見ると、いろいろなことが記載されている帳簿なのにもかかわらず、何々名の百姓は田地を何反、畠地を何反持つており、それが何年かたつとこう変化しているというような表をいろいろ作っているのです。また石母田正さんの『中世的世界の形成』の中で、平安後期のある女性の領主の讓狀があげられています。そこには田畠、在家、所従、桑、芋、牛、馬と並んでいるのですが、その史料を引用された石母田さんは、「かくのごとく平安後期の領主も、中世の在地領主と同じく、その所領の構成要素は田畠、所従、在家の三要素から成り立っている」とまとめられており、桑と芋と牛と馬はなぜか切り落とされています。

これは重大なことなのです。封建領主制は、領主による農民の支配を基本的な関係としているというところから石母田さんの頭の中にもしっかりと入っており、桑や芋、牛や馬は全く切り落とされているのです。もちろんだれも研究しなかったわけではありませんが、田畠・在家の研究に比べると、これらについての研究は全く少なかったと思います。実際、これまでの荘園の研究を見ますと、どここの荘園についても田畠はもちろん、在家の数についても研究されており、国の大田文、畠文、在家帳が注目されていました。

しかしそれ以外に荘園、公領では栗林について必ず何町何反と面積を調べています。百姓一人ひとりについても栗林を何町何反持っているのかをきちんと調べており、播磨国矢野荘西方では栗林の檢注取帳も残っています。田畠と全く同じ手続きで

檢注をやっており、目録も作っているのです。恐らく栗林帳という帳簿が国衙にはあったと思うのです。

同じように漆、桑、柿などはすべて本数を調べています。桑と漆については、古代から調べており、桑漆帳という帳簿があったことも分かっています。これは中世でも必ず作っていたに相違ありません。また、柿帳もあったかもしれないのです。柿は庶民の生活の中で非常に大きな意味を持ってきた樹木だと思います。しかし、柿の研究はだれもやってません。柿は、渋を取ります。柿については民俗の研究はありますし、柿色の衣には注目されていますが、歴史的な研究はありません。しかし、柿の庶民生活の中でのさまざまな機能については、史料はかなりありますから若い方々に「ちょっと頑張れば、論文一本書けますよ」などと言って、あちこちで扇動しているのです。実際、柿の研究は十分に意味があります。支配者の方が目がきくわけで、柿も本数を調べて帳簿を作り、十本に一連の税金をかけています。天皇家も摂関家も伊勢神宮も柿御園という柿の果樹園を美濃、近江、尾張に設定しています。柿について支配者はちゃんと目をとめてきたのです。

どうも我々のような研究者よりも、現実生活している人たちのほうがずっと本気であるということは、当然ながらこのことから見てもよく分かります。栗林も今までぼんやりして見過ごしていたのですが、木村茂光さんが林は大体栗林だということを描いておられます。ただ栗林は確実に意識的に造林し

ています。縄文時代から栽培していたという話が、最近の三内丸山や桜町遺跡の発掘で分かってきましたが、古代には造林した証拠があるのです。

百姓的建築と漆器

『日本三代実録』の貞観八年（八六〇）正月二十日条によると、鹿島神宮が二十年に一度の遷宮のときに使う材木を今までは、最近暴れた那珂川の上流の山奥から木を切り出して運んできたけれども、運賃も高いし、労力もかかるので、お宮の側の空地に植えやすく成長の早い栗の木を五千七百本植え、それに加えて三十四万本あるいは四万本の杉を植えるとあります。鹿島神宮は相当大規模な杉の造林をやったと推定できるのです。

貞観とは大体九世紀半ばをちょっと過ぎたころですが、造林はそのころから日本の社会のあちこちで活発に行われていたということになります。栗林も確実に造林しており、何町何反というようになりま。栗林も確実に造林しており、何町何反というような検地の仕方をしていきますから、負担は一反別何石何升の栗という形になっていますが、私は栗の实だけでなく、栗の木は材木として使われていると考えます。百姓の家の建築の材木には栗材を使っていたのではないかと思うのです。もちろん領主が栗材を出せと言え、百姓が出さなければならぬ場合もあり得たでしょう。しかし百姓も自分で栗林を栽培し、自分の家をたてたと思います。これまでわれわれは、衣食住のうちの食についてはずいぶん研究をやってきたと思います。しか

し、住について、百姓の家はだれがどのようにして建てたのかについて、私自身は考えたことがなかったことに最近気がつきました。これは庶民の生活の根本だと思うのですが、正直何一つ考えてこなかったのです。大工が建てるなどと思っていたわけではないのですが、やはり本気で考えなかったのです。そのことに気がついて少し調べてみると、鎌倉時代の前期、丹波国雀部荘の地頭が、百姓を動員して政所を作れという命令を出しており、百姓はそんな前例はないと抵抗しています。地頭は前にどこかの家を買ってきて百姓たちが家を作ったではないか、どうして地頭の政所を作らないのかと責めたてたのです。結局、地頭の主張は通りませんでした。しかし考えてみるとこれは非常におもしろい話で、百姓は自分でどこかの古屋を買ってきて、荘内に大湯屋を作っているのです。湯屋はいまのサウナですが、どうして湯屋を作ったのかは分かりません。しかし百姓はそういう大きな建物を作っており、地頭も百姓を動員して政所を作らせようとしているのです。決して番匠や鍛冶を特別に集めてきて建築をさせているわけではないのです。これは百姓がどこまでできるかは分かりませんが、ともあれ建築の能力があることを前提にした動員だと私は思います。

実際、屋根ふきの人夫に百姓を動員することも行われています。最近では薬ふきの屋根の家が少なくなりましたが、これは屋根ふきの職人がいなくなったからだという話を聞いたことがあります。屋根ふきは職人の仕事だと思っていたのです。しかし考え

てみれば江戸時代、百姓たちが結によって皆でやっていると考えて不自然ではありませんし、中世でも同様でした。そのように百姓たちは屋根も葺くことができたし、家も建てられたのです。

また古屋を解体して持ってきて、新しく建てるのがさかんに行われていることも鎌倉初期から確認できます。専門の番匠、鍛冶の入る余地はないので、番匠、鍛冶は神社や寺院を作るときには確実に建築に携っていますけれども、百姓の家を作るときには番匠、鍛冶は来ないのではないのでしょうか。つまり、百姓的建築があったのです。

近年の縄文時代の遺跡から普通の人の作った家に非常に高度な建築技術を用いていることが報告されていますが、こうした技術はその後も社会の中に継承されていただろうと思うのです。漆も同様で、漆も古代から本数を調べており、百姓が自分で栽培して自分で漆を掻いています。現地で百姓たちは漆を使って漆器をつくっていると思います。もちろん漆の一部は年貢として都に送られています、現地でそれを使い木器を作り、百姓も漆器を作っているのではないかと思います。これを「農間稼」「ああ、副業ですか」などと思わないでいただきたいのです。むしろ逆だと思うのです。百姓的漆器生産が、地域によってはかなり広く行われていた蓋然性が非常に大きいと思います。それであればあれほど大量の漆器が中世の遺跡から出てくるはずはないと思うのです。塗師や轆轤師ももちろん活動しており、

こうした職人によって作られる漆器は非常に高度なすばらしい芸術的な漆器だと思いますが、しかし、日常雑器としての漆器は恐らく百姓的な漆器生産によって供給されていたと、十分考えることができると思います。

そういう百姓的な漆器生産の広い基盤の上に立って、すぐれた中国大陆の技術を受容し、それにまさるとも劣らぬと言われるぐらゐの独自の漆器生産の技術が日本の社会の中に深く根を下ろしているのだと思います。単純な物真似などできるわけがありません。「日本人は真似がうまい」などと言われるのは、少しどこか見方が狂っているのです。建築についても百姓的建築の非常に広い基盤があって、初めて神業とも言えるような職人芸がそれに支えられて生み出されてくるのだと思います。

桑と絹生産

古代、中世では百姓の栽植している桑の本数も調べております。私は桑で養蚕をして取れる絹はぜいたく品だと最近まで思っていました。多くの歴史家も百姓が絹のようなざろっとした着物は着ていないと考えており、貴族や領主、僧侶の着る衣料のため、あるいは特別な用途のために絹の生産・貢納が行われていたと考えたのです。しかし、決してそのようにはいえないうです。十三世紀半ごろにはもう百姓の財産目録に絹小袖を見ることがができます。恐らく私はそれは平安時代あるいはもっと古い時代にまでさかのぼれるのではないかと思います。もちろん決して上等な

絹ではないと思いますが、百姓も絹を着ていたと思います。それは、桑の植えられていた本数が貢納のためなどとは到底言えないような膨大な数に及んでいることからわかります。弘仁八年（八一七）伊勢国の多気郡には約十四万本の桑が植えられています。十四万本の桑でどのくらいの蚕が養え、どのくらいの絹が取れるか私には分かりませんが、少なくとも貢納のためだけの絹生産とは考えられない本数だと思います。このレベルの本数の桑が至るところの荘園で植えられており、年貢を絹で出している荘園は、尾張、美濃をはじめ東国の荘園にはきわめて多いのです。麻、カラムシから取れる布も盛んに生産されており、東国の荘園は絹布などの繊維製品を年貢として納めています。

女性の仕事

絹は交換手段になりますから、米と同様に、絹で田畠や商品を買うことができます。これを一つの目的として絹が生産されたこともあり得ると思いますが、それだけでなく絹は百姓の女性の衣料となったことも十分に考えておく必要があると思います。

また、この点も私自身の自己批判ですが、養蚕から製糸、絹織物がすべて女性の仕事だったという当たり前のことをこれまでも本気で考えていなかったのです。私の母、祖母の世代は、山梨県では必ず養蚕をやっていました。蚕を飼い、糸を取って、絹まで作っており、機織りの道具はこの家でもあったと思います。今はみな壊してしまっほとんどなくなりつつあると思

いますが、私の妻の母は結婚するときに自分で蚕を飼って作った糸で織った「うち織り」という粗末な絹で布団地を作り、綿を入れ、布団を結婚の贈り物にしてくれました。私が結婚したのは一九五五年ですから、ごく最近までそういうことが行われていたわけです。養蚕のはじまるのは弥生時代だと思いますが、すべて女の仕事だったと思います。

麻も木綿も女性の仕事だと思います。ところがこれまでの女性史研究の中でこの分野に本当に目を向けられた研究は、ないのではないのでしょうか。女性の社会的な労働は、男の補助労働であり、養蚕もまた農業の副業だというくらい方をしてきたのだと思います。しかし、養蚕は決して男の管理下にあったわけではなく、女性の独自の労働の分野だったのです。

平安時代には、「農夫」と「蚕婦」が対称させられています。

農は男性、養蚕は女性、という分業は一貫しております。「農桑」という言い方も中世にはたくさん出てきます。このように桑、養蚕は、農業とは別の生産分野であることがはっきりと認識されています。しかも重要なことは生産して作ったものを女性が自分で市場に持って行って売っている点です。繊維関係の中世の商人がみな女性であるのは、百姓の女性による糸や絹の売上の発展とみることでできると思います。百姓の女性は実際に市場で商人に糸や綿や絹織物を売っていますから、おのずと専門の商人も女性ということになっていると思います。とすると女性性は相場を見て売っているに相違ありません。ある学者が「女

性は商人にだまされて、安くまゆや糸を買いたたかれた」などと書いていますが、私はそれほど女性をばかにしてはいけな
と思います。十三、四世紀には市場で相場が立っていますので、
女性はあるべく相場が高いときを見て売ろうとしているに相違
ありません。まして専門の商人でしたら、当然そうしていたは
ずで、江戸時代まで一貫して、養蚕によって生産されたものに
ついては、女性がそれを売買して、現金を入手するところまで
を仕切っていたと思われます。そうだとすると、こうして糸や
絹を売って獲得した収入は女性のものになったと思います。自
分で作り、自分で市場にそれを持って行ってなるべく高い値段
で売って獲得した錢を、女性は男に簡単に渡さなかっただろう
と思います。もし夫がよこせと言ったら、利息をつけたら貸し
てやるぐらいのことは言ったに相違ありません。

ルイス・フロイスはヨーロッパでは財産は夫婦共有であるが、
日本では夫婦がそれぞれ別に財産を持っていると書いています。
これは十六世紀末期のことですから、土地財産についての権利
は女性には公式にはないはずで、大体このころから女性の地
位は低落するというのが、これまでの常識であったのですが、
これは動産については修正せざるを得ないと思います。さらに
フロイスは、時によると妻は夫に高利で金を貸すともいって
いるのです。これは十分にありえたことで、錢については女性は
江戸時代を通じて一貫して自分の権利を持っていたのではない
かと思います。その伝統で、今でも我々は妻に財布のひもを完

全に握られるということになっているのかもしれませんが。しか
し、公的な世界については女性の地位は確かに日本の社会では
非常に低いのです。これは大きな問題であり、今までの婦人運
動、女性解放運動はみなそこに焦点をあてていますが、家に帰っ
て錢や、動産の世界になると、男は女性に頭が上がらないとい
ろがあったと思います。これはこれからもっと考えなければな
らない問題で、それとともに女性の社会的な地位を考える場合
に、これまで養蚕という最も大切なことを落としてしまったの
ですが、それだけではなく、女性は、紙もすいています。紙の
生産も女性がやっていると思いますし、酒もつくっています。
このように女性が実際生産を担っている分野は、農業の補助勞
働、田植えの早乙女や草取り、脱穀の仕事だけではなくて、ほ
かにもいろいろあったはずで、その中で女性自身がどのように
社会の中で自己を主張していたかについては、まだまだ研究の
余地が広く残っていると思います。

女性の地位

ことに日本の近代化の花形産業だった製糸業は女性しか入れ
ない職場なのです。確かに『女工哀史』のような一面もあると
思うのですが、裏返して言うところには男工は入れないので
す。「誇り高き」女工しか入れない職場で、男にはそうした能力
がないのです。このような女性だけの職場ですから、日本最初
のストライキは山梨県の製糸工場の、女性たちがやったのだと

言われています。女性の職場だったための低賃金、劣悪な労働条件もあったと思いますが、逆に言いますと二千年以上に及ぶ長い伝統を持った養蚕についての女性の経験と蓄積がなければ、日本の近代化を推進した輸出産業の花形である製糸業は絶対成り立たなかったはずです。その側面をもっともって評価してもよいはずです。富岡製糸工場でも士族の女性が働いていたのですが、これによって士族の女性も養蚕をやっていたことがわかりますし、地主の女性も養蚕ぐらいやっていたと思います。

そういう面から女性の地位をもう一度考え直すことが大変大事だと思います。これまで我々は自給自足経済から商品経済へと、いとも簡単に当り前のように言っていました。これは人間はまず自分の腹がいっぱいになって、余分なものができたら、それを市場に持って行って売る動物だという見方に立っていることになります。しかし人間は最初から社会を意識して生活しており、最近の発掘成果からみて、縄文時代から自給自足などということとは厳密の意味ではありえないので、非常に早くから交易のために生産することが行われていたとみなくてはなりません。田畠の米、麦、大豆のような穀物だけでなく、山野河海でもいろいろな産物を普通の人々が生活の中で生産をしていたとすると、普通の人々を巻き込んだ商業や流通は、非常に早くから展開していたはずです。これまでは農業、工業のように物を作る生産こそ社会を発展させると考えられてきましたので、ものを作り出さない商業、金融、流通、情報については研究の主力に置かれていませ

んでした。最近は大分変わってきたとは思いますが、主流はまだ決して変わったとは言えないと思います。

おわりに

いまもふれたように、これまでは農業生産力、工業生産力を発展させることこそ、社会を進歩させる道だという見方が支配的でしたが、この見方はもはやそのままでは成り立ちがたいと思います。むしろ最近では工業はもちろん農業自体による自然破壊すら考慮に入れなくてはならなくなってきているのです。それ故これまで生産力の発展、進歩にのみ焦点を合わせてきた結果、我々が切り落としてきたさまざまな要素、さらに進歩の過程でおきざりにされたもの、時代を進める勝利者の影で、敗退してきたものの持っている意味を、もう一度再評価する必要があります。現代という時代にはとくに非常に必要になってきているのではないかと思っています。

例えば採集狩猟民や漁労民の山野河海に対するかわり方には、生産制限をして、乱獲を避ける姿勢が古くから見られます。江戸時代まではそういう自然に対する姿勢を追求することができました。また流通、交通、商業、金融等々、ものを生産しない諸活動の意味、さらに女性や老人や子供の独自の役割などを見直すべきことはたくさんあります。しかし、それを見直すことによって初めて我々の正確な歴史認識が得られるのではないかと、最近では痛感しているのです。進歩の名のもとに切り落と

されてきたものに、もう一度目を向け、勝とうと勝とうとする負けず嫌いのたち、勝利のみを求める人たちには絶対分らない、負けたことのある者にしか分らない知恵を汲みとって、それを未来に生かすことが私は大事だと思います。負けた者の方がはるかに物がよく見えるところもあるわけで、それを生かすことによって初めて、これからの難しい時代を生きていく道を開くことができると思います。

日本列島の社会の歴史を見直すというテーマを与えられて、大変勝手なことを述べ立てましたが、見方を変えてみれば、まだまだ明らかにするべきことがたくさんあるということだけは間違いありません。コンピューターによって資料の蒐集・整理が容易になっている現在、若い方々はもともとと頑張って仕事をしていただきたいと思います。先ほども言いましたように、日本の技術は、普通の人の中に広く蓄積された技術の地盤の上に、高度な技術の花が咲いているのです。学問も同じで一人二人の学者の力で学問が進むものではなくありません。多くの人々がそれぞれに自分たちの身の回りの問題を取り上げ、追求していく努力が広く進められることによって、初めて本当の意味で日本の社会を正確に見る歴史学が育つのではないかと考えます。大分時間を超過しましたが、これで私の話を終わりにします。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

(一九九八年九月二十八日、新宿・紀伊國屋ホール
あみの・よしひこ／元神奈川大学特任教授)



志と質の高さを求めて！

二年半前、「量的充実は言うまでもなく、志と質の高さにおいて、わが国を代表する書店をめざす」と高らかな目標を掲げ、「平安堂新長野店」は平安堂グループの基幹店舗として、JR長野駅前の再開発ビル「ウエストプラザ長野」に開店いたしました。

2F・4F、三フロア五八〇坪（書籍五五〇坪、喫茶三〇坪）県内最大規模でオープンしたわけですが、開店にあたり最も大切に考えたことは、「地域のご要望を最大限取り入れた店づくり」でした。

一万人の読者インタビュアー、有職者三〇人からなる「長野の大型書店を考える会」からの提言、一〇〇名以上のボランティアさんからのご意見など、大勢の市民のご協力を得てスタートいたしました。

なかでも大型書店を考える会からの、次の七つの提言を店づくりの骨子といたしました。

平安堂新長野店

店長 内山 貞 男

- ① 日本一探しやすい本屋
 - ② 一〇〇万人読者の知的欲求に答える品揃え
 - ③ 信州文化の発信と活性化
 - ④ 未来の読者を育てる場
 - ⑤ 読者が運営に参加する新しいスタイルの書店
 - ⑥ 常に話題性にあふれ、読者との双方向性を大切にす
る書店
 - ⑦ やすらぎと癒しの避暑空間
- この他にもさまざまなご要望を、多くの方から実にたくさんいただきました。
- 当社にとって、これだけの規模の書籍売り場は初めてのことであり、商品計画には難儀をいたしました。
- 特に専門書については大変な苦勞を強いられました。版元さま、日販さま、某大書店さまのご協力をいただきましたが、進めたのですが、全体像がきちんと描けない実力不足の

なかでは、とうてい満足な品揃えでスタートすることはできませんでした。そして現在まで、専門書との格闘は続いているのであります。

人文書につきましては先般、人文会さまのあたたかなご支援のもと、二日間にわたる研修会としてご指導をいただき、お陰さまである程度の棚作りが出来たように思います。紙面をお借りしまして、改めて御礼を申し上げます。

さて、地方の大型書店に対して、お客さまは何を求めているか？ 一番店に対する期待と役割は何か？

すべての分野について、量と質への期待が大きいのはもちろんですが、特に専門書に対しての要望が大変強く伝わってきます。

書店選びに選択肢の少ない地方都市では、大型店に課せられた役割は、サービスの充実もさる事ながら、「商品充実」が最も大きいのではないのでしょうか。

そしてそれは専門書について、たいへん強く感じるのです。「専門書をきちんと揃えて、ご要望に応える」ことがとても重要なことと認識しております。

さて、それを具体的に化する時に、まず突き当たる壁は人材であります。社内において、組織的に人材育成が行われてきていればならぬ問題はないのですが、当社にとって恥ずかしいことですが、専門書分野は全くのウィークポイントでありました。

専門書はとくに、担当者の力量に左右される分野であり

ます。

二年半が経過した今、歩みは大変のろいですが確実に担当が育っており、徐々に棚も形になって売り上げも順調に伸びてきております。

さまざまな形でご指導を仰ぎながら、担当者の育成に全力を注ぎたいと考えておりますので、今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

一般の研修会において、当社社長、平野が挨拶の中で「こんな時だからこそ、人文書を大切に売ってゆきたい。今こそ人文書が求められている時代」と申しあげましたが、私も全く同感であります。

会員社の皆さまが精魂こめてお作りになられた本を、「すばらしい読者との出会い」の場に、われわれはきちんと登場させてゆかなくてはなりません。

よい本を出される出版社さまを、書店は販売という形で支持してゆかなければ、われわれの存在意義はないものと思います。版元さまに対して、また読者というお客さまに対して、書店が果たすべき責務に他なりません。

人文書のような地味な本は特にそれが言えると思うのです。今後ともご支援をいただきながら、お客さまの望まれる品揃え、棚づくりを追求し続け、課せられた役割を果たせるように努力し続けたいと思います

どうぞ、引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。

老舗の気概を感じた二日間

無知の恥

二月四日、五日の両日平安堂と人文会の合同研修が行われた。長野は自分の担当地区でもあり、新長野店は度々訪問していたが、こうした研修は初参加なので期待と緊張の中、長野駅に降り立った。

二月の長野とは思えないわずかな残雪を見ながらバスに乗り込み、新長野店内山店長、商品企画部長崎氏の案内でまず新あづみ野店を訪問。田村店長、桑垣副店長、人文担当加藤氏の出迎えをうけた。

同店は九八年に二度目の移転地となる同地区最大のパワーセンター内にオープン。平安堂の店としては最大の六〇〇坪（書籍二二〇坪レンタルビデオCD等含む）でFＣ店のモデル店舗との事。売上げもレンタル等を含めば一番店で、さしずめ平安堂グループの優等生といったところ。人文会が事前に企画したブックフェアが行われており、「人文書を読んで自分の無知を恥じよ」との意図（長崎氏）でつけられたそのフェアのタイトルが「無知の恥（むちのち）」こう

三 上直樹（ミネルヴァ書房）

いうところに平安堂の郊外店という気概を感じながら店内を見学。「家族連れが多い」（田村店長）ことを生かしワンフロアに書籍、ビデオ、CDなどが明確な区切りを持たずに配置された回遊性の高いレイアウトでいつ来ても楽しいと思わせる雰囲気。人文書の充実をこれからの課題の一つとされているのだが、「客注が月に一〇〇〇件」（田村店長）というのは潜在能力の高さをうかがわせて心強い。こういう書店を開拓していくことの必要性を版元として痛感した。

この後若槻店訪問の予定が変わり須坂のJBC（ジャンブックセンター）の建設予定地を見学。十万坪の敷地の内まず一万坪を使って立ち上げる予定で一部整地されている。とにかく土地の広さには驚かされた。構想自体はかかなり前からあり、しかしその後も物流があまり改善されていない現状を考えると、実際に稼動すれば物流変革の起爆剤となるのかもしれない。

新長野店に向かって長野市内に戻る途中で急遽東和田店を訪問。同店は直営店で書籍の売上は上位にランクされて

いる。元はスーパードット建物のためレイアウトには苦労されている様子。突然の訪問にもかかわらず小宮山店長は丁寧に対応された。

あわただしく東和田店を後にし、いよいよ新長野店へ。なお、ここまでのバスの道中、商品企画部長崎氏のスマートフォン〈添乗員〉ぶりには人文会一同から感心の声しきりだった。

旗艦

新長野店はまさに「旗艦」と呼ぶにふさわしい、映画で見たタイタニック号の船首を思わせる堂々たる建物。九七年一二月にオープン、2・3・4Fの三フロアで計五八〇坪。探しやすい、やすらぎと癒し、地域に密着した読者参加などを特色とした「書籍専門館」を標榜する。タッチパネル式在庫検索機の設置、ソファアーム椅子やカフェ、多彩なイベント、サイン会等でそうした特色を具体化している。

内山店長、松澤、横田両マネージャーの案内で「知識のフロア」と名づけられた4Fの人文書コーナーへ。棚はかなり背が高く、平台は各エンドコーナーにあるといった程度でその分通路が広くとれ、ソファアームがゆったりと配置されている。このソファアームが翌日の研修会で晶文社の島田氏が「上等すぎるのでは？」と言うほどのふかふかの優れ物。自分も長く座っていたかったが、睡魔におそわれそうになり（本当に寝る人もいるらしい）立ち上がり、研修会に

備えて棚のチェックを開始。

一部棚替え中のため各ジャンルの相互連関に違和感があったが、商品量はかなりのもの。特に思想、歴史などは充実していて、売上げが二ケタ以上の伸びというのもうなずける。人文書担当の近藤氏から各ジャンルに対する質問表が出されており、研修会への期待を強く実感した。

見学を終えた後、平野社長を筆頭に平安堂本部並び新長野店の幹部の方たちと担当の方との懇親会が開かれた。

一六〇キロの速球

人文会は今までに全国で書店との研修会を数多く行ってきた。その中で幾度か（毎回？）人文書を買りたいという熱意のあまり書店に対してややストレートすぎる発言がされることがあったと聞いている。懇親会冒頭、そうした人文会の履歴を良く知る菊池明郎代表幹事が「明日の研修会は一六〇キロの速球を投げ込むつもりで臨む」と挨拶、これに対し平安堂平野瑛児社長が「しっかり受け止める」と応えられ、双方の研修への並々ならぬ意気込みを感じさせた。

五日朝からの研修会は人文会側から各ジャンルへの提言を行い、それについて質疑応答する形ですすめられた。おおよっぱに言えば、全体的には基礎的な部分はかなり構築されつつあるので更に発展性を求めたいというのが人文会の提言の概要。また築摩書房小山氏による人文書の棚作り

における具体的な方法論のレクチャーも行われた。平野社長は当日一度も席を立たれることなく研修会終了まで同席され人文会諸氏の意見をまさに言葉どおり「しっかり受け止め」られたのだった。

研修会の最後に前述の長崎氏より「BRAIN (Booker's Research And Information Network——書店の販売、在庫情報の公開及び、配本部数決定支援システム)」の説明が行われた。これはインターネットを利用して版元に書店の売筋商品の在庫状況を日々開示して適正な部数を出庫してもらい、過剰送品や減数をなくするというシステム。まだ一部の版元のみだが既に稼働されている。除々に

他の書店、版元にシステムとして売り込んでいくとの事。須坂の予定地を見た時もあったのだが、いずれは取り組まなければならないこと、開拓していかなければならないことを地方からいち早く（ハンディゆえなのかもしれないが）発案、実行されることには敬意を表したい。老舗としての地位に甘んじることなく常に業界の問題を真剣に捉えてきたからこそできることなのだろう。あつという間の二日間だったが、あらためて再認識させられることが多い研修だった。

最後に平野社長をはじめ平安堂の皆様にはこの誌上をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

法政大学出版局

www.terra.dti.ne.jp/hosei-up/

表示価格は税別

合田正人・谷口博史・江川隆男・他 訳 ベルクソン講義録 全四巻

ベルクソンの真の「哲学的コアパス」を成す全四巻の講義録。幾重もの謎に包まれた根本的テーマが明らかにされると同時に、フランス思想研究にとつての、あるいは哲学・講義を見直すための今世紀最大の重要資料！

▼内容案内▼
I 心理学講義／形而上学講義……七六〇〇円
II 美学講義／道徳学・心理学……七六〇〇円
III 近代哲学史講義／靈魂論講義……七六〇〇円
IV プロテイノス講義／ギリシャ哲学史講義……七六〇〇円

本年十月刊
明年六月刊

エドモンド・バーク／中野好之編訳 バーク政治経済論集

保守主義の精神

アメリカ独立戦争とフランス革命の時代に、英国下院を舞台に活躍したバークは、議会政治と民主主義の意義、継承と改革の論理、政治家と政党のあり方について、不屈の信念と明快な論理をもつて論じ、後世、「政治的睿智の不朽の手引き」（ラスキ）と称えられた。その一七六六年以降三〇年間にあつた演説・報告・書簡を集成。二万三三〇〇円

102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 5214-5540 FAX 5214-5542

人文会会員名簿

(〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21 みすず書房内)

2000. 6. 現在

社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	F A X
青 木 書 店	佐藤 貞男	175-0092	板橋区赤塚8-12-12	5997-4051	5967-7691
大 月 書 店	原田 敦雄	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	156-8691	世田谷区桜丘5-38-1	3439-0128	3439-3955
勁 草 書 房	内藤 繁人	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
社会思想社	对比地邦男	113-0033	文京区本郷3-25-13		
			中銀本郷3丁目ビル	3813-8105	3813-9061
春 秋 社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	重光 義彦	162-0801	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草 思 社	浴野 英生	150-0001	渋谷区千駄ヶ谷2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑 摩 書 房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷7-3-1		
			東京大学構内	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	後藤 光行	170-0005	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
福 村 出 版	土屋知可夫	113-0033	文京区本郷2-30-7	3813-3981	3818-2786
平 凡 社	藤代 俊久	152-8601	目黒区碑文谷5-16-19	5721-1234	5721-1239
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北3-2-7		
			法政大学一口坂別館内	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	福田 晴行	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町1		
			(075) 581-5191 (075) 581-8379		
		101-0054	千代田区神田錦町3-6		
			石澤ビル3F	3296-1615	3296-1620
未 來 社	吉田 哲夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
有 斐 閣	田村 謙二	101-0051	千代田区神田神保町2-17	3265-6811	3262-8035
吉 川 弘 文 館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544
(休会中) 雄 山 閣 出 版		102-0071	千代田区富士見2-6-9	3262-3231	3262-6938

会 長 菊池 明郎
 代 表 幹 事 福田 晴行
 会 計 幹 事 重光 義彦
 書 記 幹 事 吉田 哲夫

販売企画委員会 内藤 繁人・田村 謙二・对比地邦男・土屋知可夫・後藤 光行
 調査研修委員会 原田 敦雄・鎌内 宣行・佐藤 貞男・新保 卓夫・藤代 俊久
 図書館委員会 成田 共助・馬場 正彦・島田 孝久・大江治一郎
 弘報委員会 平石 修・杉田 啓三・段塚 省吾・浴野 英生・平川 恵一

勁草書房

斎藤慶典

思考の臨界

超越論的現象学の徹底 強靱な思索によって拓かれる沃野。5500円

神川正彦

価値の構図とことば

価値哲学基礎論 「ニーチェ以後」の根源から価値論を構想。9500円

正村俊之

情報空間論

情報の概念を原理的に問い直し、変容する現代社会に迫る。4800円

東京都文京区水道2-1-1 * 価格税別
Tel 03-3814-6861 / Fax 03-3814-6854
<http://www.keisoshobo.co.jp>

リチャード・ローティ

ポストモダンの魔術師

■渡辺幹雄 西洋哲学の統合を企む注目の鬼才の思想的中核を明快に分析した話題作。五〇〇〇円

ロールズ正義論の行方

その全体系の批判的考察〈増補新装版〉

■渡辺幹雄 現代政治哲学の巨魁の全貌を解説した本邦初の力作。最新作分析を増補。五三〇〇円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎(03)3255-9611<価格は税別>

子どもはどこで 犯罪にあっているか

犯罪空間の実情・要因・対策／中村攻
暴行・恐喝・痴漢。実際の被害現場の
実地調査に基づき、街にひそむ危険性
を多くの写真・地図をまじえて指摘、
対策を提案する。増刷出来／1995円

医療倫理の夜明け

臓器移植・延命治療・死ぬ権利をめぐつて／デイヴィッド・ロスマン 酒井忠昭
監訳 医療を支配するのは誰か？ 実際の事件や裁判を通して考える全米話題の医学ノンフィクション。3780円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03(3255)4501 価格は税込
<http://www.shobunsha.co.jp/>

年金で豊かに暮らせる町
わいふ編集部編 老後は、日本にも住みよい町がある。年金が一・五倍に使える安心の町に移住しよう！一定年後の人生設計を考えるガイドブック。続々大増刷中●一六〇〇円

復刻版 日本庭園史大系
重森三玲 重森完塗著 大橋治三撮影●一八〇、〇〇〇円
検索機能にすぐれたCD-ROM5枚と、設計や研究資料として付加価値の高い実測図一八枚セット ■案内送呈

虹の民におくる歌 矢沢寛訳
ビート・シーガー自伝 生涯80年記念出版 予七五〇〇円

社会思想社 東京都文京区本郷3-25
☎03-3813-8101(税別)

草思社

奇跡的に快復した今、生きている意味を問い直す。
ふたたびの生 柳澤桂子

「この点滴を抜いて下さい」ついに死を決意したとき、奇跡は訪れた。生命科学者が、生を取り戻すまでの胸の内をつづる感動の書。 ●1400円

**放浪の天才数学者
エルデシュ** ポール・ホフマン／平石律子訳

世界中を放浪しながら数学三昧。史上最高の頭脳をもつ宇宙一おかしな男の波乱の生涯。 ●1800円

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8
☎03(3470)6565 価格は税別です

誠信書房

食べ過ぎることの意味

過食症からの解放
ジェニーン・ロス著／斎藤 学監訳
食から自分自身を取り戻すための書。2300円

夢のアンソロジー

S.ブルック編／小川捷之・石井朝子訳
膨大な夢の記述をテーマ別に収録。2800円

**続 構成的グループ・
エンカウンター**

國分康孝編
学級崩壊・いじめなどの対策に有効。3800円

遊戯療法の研究

日本遊戯療法研究会編
気鋭の心理療法家による多彩な論集。3000円

東京都文京区大塚3-20-6/☎03-3946-5666 <税別>

岩井克人

**二十一世紀の
資本主義論**

恐慌よりも恐ろしい危機が来るのか？

世紀末をおそった金融危機は、これからはくりかえし起こるであろう。だが、真の危機はその先に「ドルの危機」として出現する！ 卓越した最新論考集。 2200円

筑摩書房

サービスセンター 048-561-0053

知のカタログ

■知性をブラッシュアップ■

西洋思想

M・マクローン著 岩坂彰訳
ギリシア哲学から現代思想まで画期的思想79項目(英語併記)をとりあげその意味を簡潔にまとめる。欧米の知性の基礎を解説。 1600円(税別)

聖書の名句

M・マクローン著 岩城聡訳
エデンの東、アロンの杖、両刃の剣、ミレニウム、エヴァンゲリオンなど、175の名句(英語併記)を平易に解説したユニークな本。 1700円(税別)

創元社 大阪市中心区淡路町4・3・6
新宿区神楽坂4・3 煉瓦塔ビル

栗原 彬・小森陽一・佐藤 学・吉見俊哉

内破する知

四六判／二二〇〇円

身体・言葉・権力を編みなおす

長谷川寿一・長谷川眞理子

A5判／二五〇〇円

進化と人間行動

亀口憲治

A5判／三四〇〇円

家族臨床心理学

子どもの問題を家族で解決する

ヨーロッパ中世史研究会編 A5判／三二〇〇円

西洋中世史料集

東京大学出版会

東京都文京区本郷7-3-1 ☎03-3811-8814
<http://www.utp.or.jp/> <表示は本体価格>

発達研究の技法

シリーズ・心理学の技法

田島信元・西野泰広編著 研究の手順、留意点、実際
例から倫理、論文の書き方まで、発達研究の方法論を
この一冊に凝縮。
A5判・定価三三六〇円

臨床心理学研究の技法

シリーズ・心理学の技法

下山晴彦編著 臨床心理学の研究方法を多面的に解説。
事例報告にとどまらない臨床心理学研究の新たな枠組
みと方法を示す本邦初の書。A5判・定価三六七五円

東京・文京
本郷2-30-7

福村出版

電話 (03)
3813-3981

定価は5%税込 <http://www.fukumura.co.jp/>

臨床死生学事典

河野友信・平山正実／編 四六判 2400円

医学・医療・看護学・心理学のみならず、倫理学・宗
教学など死全般にわたるコンパクトな読む事典。

●母親を演じることに疲れたあなたへ

母性愛神話の罠

大日向雅美／著

四六判 1700円

母になることはしあわせなこと……のはずだった。
子育てがづらい子どもが可愛く思えないのはなぜ？
すべては母性愛という神話からはじまった。

医療倫理 1

ヘンズ 患者はどこまで医療を選べるのか？ 生と死をめぐ
る思想の現在に迫る興味深い事例集。宮坂・長岡訳 臺〇〇円

蔣介石書簡集 上

丁秋霖・宋平編 現代中国史上の人物と交わされた往復書簡
三〇〇通余。民国史の第二級資料。全3巻。鈴木博訳 二〇〇〇円

舞台の上の社会

風間研 長年にわたる経験をもとに90年代の現実を映すバリ
の演劇状況を具体的に説いた。もう一つの観劇入門。三〇〇円

ロビンソン変形譚小史

岩尾龍太郎 原ロビンソンから現代まで、千を超える変形譚
を時空間の中で分析した。物語の源流をめぐる物語。三〇〇円

みすず書房 (税別)

東京文京本郷 5-32-21 <http://www.msz.co.jp>

バスはよみがえる

秋山哲男・中村文彦／編 四六判 2000円
高齢化と環境問題が深刻化する21世紀。
新しいバスの時代がはじまる。



日本評論社

受注センター ☎0492-74-1780



有斐閣 (価格税別)
東京・神田・特保町2/Tel.03-3265-6811
http://www.yuhaku.co.jp/
(ご注文は03-3817-0711)

はじめて出会う心理学
長谷川寿一・東條正城・大島 尚・丹野義彦著
初学者向けの入門書。
〔有斐閣双書〕 一九〇〇円

臨床心理学キーワード
坂野雄二編 用語を見開き二頁を中心に解説。資格試験受験にも役立つ。
〔有斐閣双書〕 一八〇〇円

シネマのなかの臨床心理学
山中康裕・橋本やよい・高月玲子編 映画作品を用いて臨床心理学を説く。〔有斐閣ブック〕 一九〇〇円

ミネルヴァ書房

夏目漱石

思想の比較と
未知の探究

宮本盛太郎／関 静雄 未だ知られていない
新資料の探索から未知の漱石像とその周辺事
実に比較思想の視点で迫る。 三五〇〇円

庄屋日記にみる

江戸の世相と暮らし

成松佐恵子 庄屋が書き残した日記から、庶民の暮らしぶりを活写する。 三五〇〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589 (税別)



未来社

表示価格は税別

スピノザの政治思想

柴田寿子〔デモクラシーのも
うひとつの可能性〕歴史的・
政治学的に解明する ●5800円

ドイツ精神の近代

矢代梓 ヴァイマル文化史や
フランクフルト学派を中心に
まとめた遺稿論集。 ●2800円

転んだあとの杖

島田とみ子〔老いと障害と〕
一瞬の不注意による転びのて
んまつ記。好評4刷 ●1700円

〒112-0002 文京区小石川3-7-2 ☎(03)3814-5521

浜口雄幸集論述・講演篇 川田 稔編
一九二九―三一年、民政党内閣を率いた浜口の政治・外交に
わたる政治活動、国家構想に関する発言の全貌を提示する。

総項目六三〇〇、最大最新の民俗百科誕生
日本民俗大辞典 上・下 (全2冊)
全2冊完結 特価各一八〇〇〇円(9月末まで)
期限後各二〇〇〇〇円 四六倍判
福田アジオ他編 沖縄・アイヌなども視野に入れた、従来の日
本民俗学の枠組を越える質量ともに最高水準の民俗大百科。
加藤友康・由井正臣編 四六倍判/二〇〇〇〇円

日本史文献解題辞典 全1冊
文書・記録・典籍から金石文・新聞雑誌・叢書に至るまで、四
七〇〇余項目を収め、懇切に解説した最大最新の文献辞典。

吉川弘文館 (価格税別)
『内容見本』送呈
東京都文京区本郷7-2-8/電話03-3813-9151